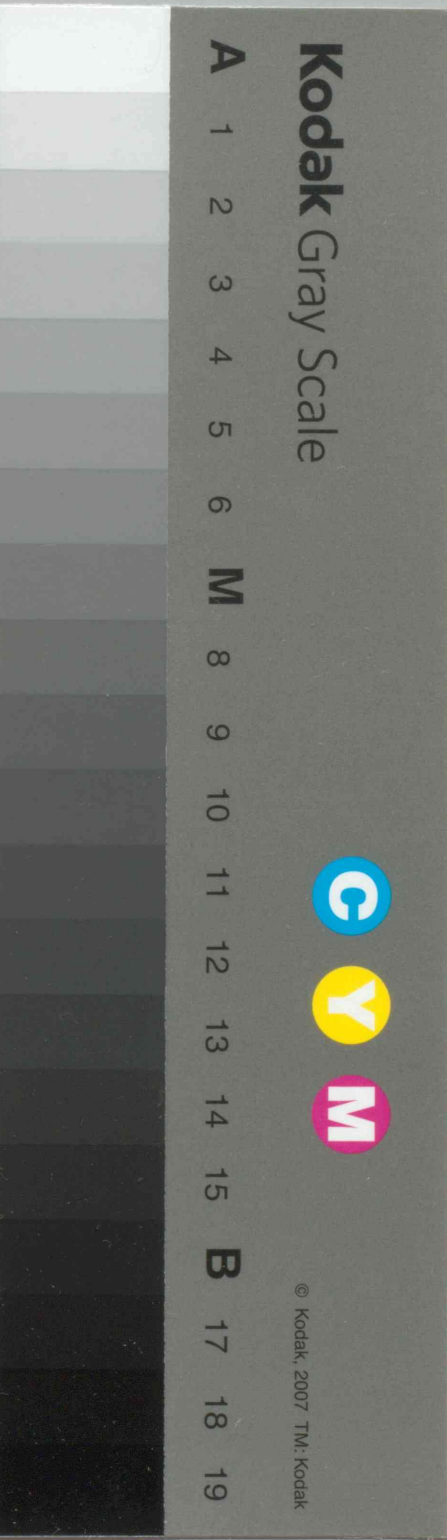
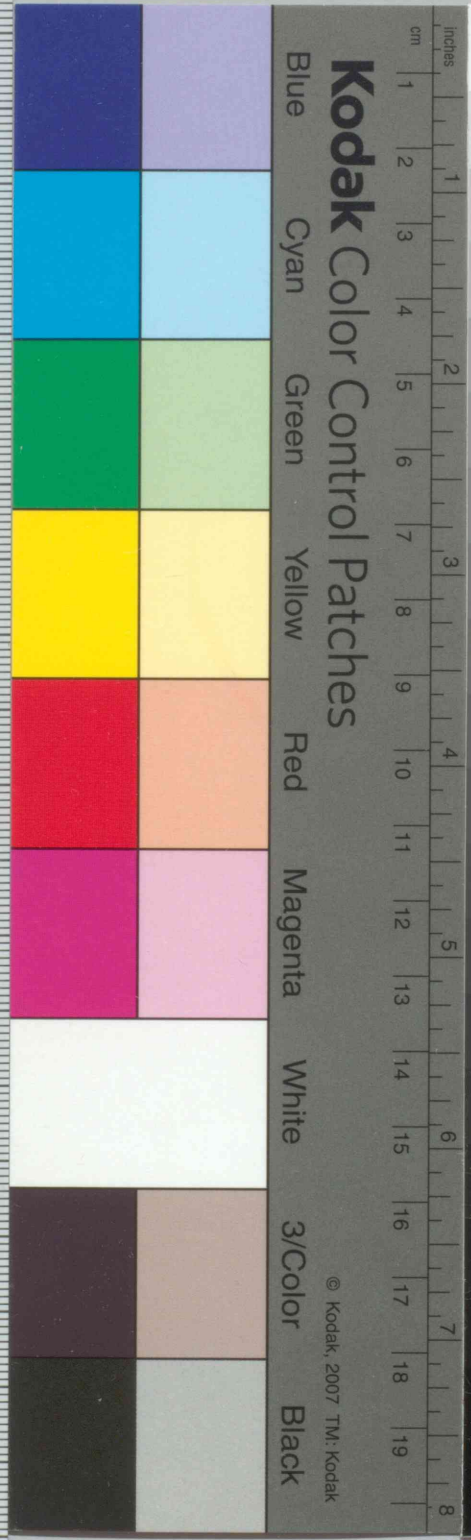


最新女子國文

修正版

卷八

375.9
Ma20
資料室



42290
教科書文庫
4
810
42-1931
2000301840
S6 1931

日三月二十年六和昭
濟定檢省部文
用科語國校學女等高

P

資料室

325.9

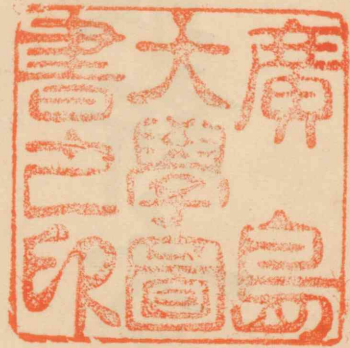
Ma 20

文學博士松村武雄編

最新女子國文

修正版

東京
大阪
寶文館



最新女子國文

修正版 卷八 目次

一	雨の都	……	笹川臨風	一
二	花月草紙抄	……	松平定信	九
三	夕ぐれの時(詩)	……	堀口大學	三
四	いさよふ月	……	阿佛尼	七
五	菅公の配流	……	「大鏡」	三
六	倫敦塔	……	夏目漱石	七
七	江戸時代の俳句(下)	……		三
八	忠度の都落	……	「源平盛衰記」	六
九	敦盛最期の事	……	「平家物語」	四
一〇	平家雑感	……	高山樗牛	四

目次

一

一一	歲晚の名家	横山健堂	五
一二	近世の和歌		五
一三	鉢木	〔寶生流謠〕	三
一四	狐塚	〔續狂言記〕	七
一五	笑	戸川秋骨	八
一六	街頭の春	〔大阪毎日新聞〕	九
一七	從弟に與ふ(簡)	吉田絃二郎	九
一八	實朝の歌		一〇
一九	常磐樹(詩)	島崎藤村	一〇
二〇	長柄堤訣別	坪内雄藏	一五
二一	妹に諭す(簡)	吉田松陰	二六
二二	無憂華	九條武子	三六
二三	世界の四聖	高山樗牛	四四

二四	梅花の氣品	豊島與志雄	一五四
二五	日本趣味	芳賀矢一	一六〇

自修文

	出家と其の弟子	倉田百三	一六九
--	---------	-------	------	-----

最新女子國文

修正版 卷八 目次終



最新女子國文

修正版 卷八

笹川臨風

文章家、文學博士。名は種郎。明治三年東京市生。

廣重

浮世繪の名家。安藤又歌川氏。安政五年没、年六十二。

見た京物語 寛永頃の京の風俗を記し、江戸のそれと比較したもの。二鍾亭半山著。

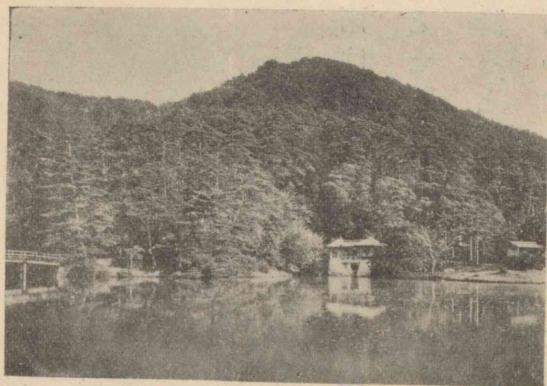
一 雨の都

笹川臨風

廣重は嵐山の花を畫き、大原の春を畫いてゐるが、しかし京都の春雨は畫かなかつた。京都獨特の雲煙は畫かなかつた。縦にしとしと降る雨は描かなかつた。見た京物語にすら「風少し、雨眞直ぐに降る」とあるが如く、眞直ぐに降る雨は、京の特色である。同じ書に「時雨のけしきは江戸に勝れり、月と時雨忽に變る、山近ければなり」とある通り、時雨は京の名物である。しかし廣重は之を畫圖の中に收めず、却つて江戸一流の夕立を畫いた。廣重は動よりも寧ろ靜を寫

す畫家であり、繁華火の如き人間境よりも、寧ろ閑寂な自然界を描く畫家であつたから、京の春雨を描き雲煙を描くには、最も適してゐたのである。嵐光煙色は彼の得意であつた。

京都名所にも其の十枚の内に、是等の自然現象を配する名所を描寫させたかつたと思ふ。



修學院離宮

渡月橋のほとりに佇んで、雨の嵐山を觀る。四條派の妙を發揮して、殆ど餘蘊がない。峰巒は明又滅、水は煙を立てて流れる。其の間を縫ふ筏には、蓑と笠とが淋しく見える。山嵐の氣がしんみりと深い。嵐山の雨景は土佐派のものでなく、雪舟派のものでなく、狩野派のものでなく、南畫のものでもなく、やはり四條派のものである。軟い、感じのよ



伏龍松

雨中の嵐山



波月橋

吳春・景文

共に松村氏。

吳春は四條派の祖。天保十四年歿、年六十五。景文は其の弟。文化八年歿、年六十。

眞葛ヶ原

京都圓山公園附近の舊稱。

大徳寺

臨濟宗大徳寺派の大本山。京都市紫野に在る。

利休

千家流茶道の祖千宗易、利休はその號。泉州堺の人。天正十九年歿、年七十一。

小倉山莊

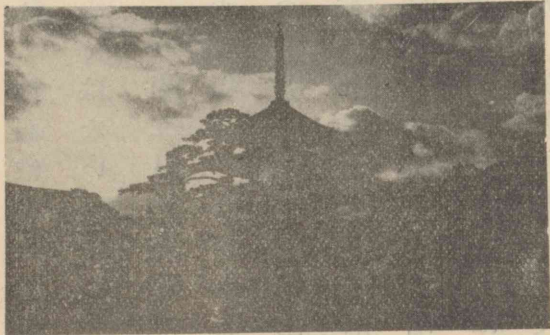
嵐山と相對する小倉山にある藤原定家の山莊の趾。

い所は、吳春・景文以後のものである。

時雨は眞葛ヶ原に名高いが、洛中洛外到る處時雨の景ならざるは

ない。或時は大根洗ふ鴨川端に降り、或時は大原を出る黒木賣に降り、修學院のお庭に降り、銀閣寺の東求堂に降り、大徳寺に利休の墓を音づれ、小倉山莊に時雨亭を音づれる。町行く人の足もそらざまに、ちまたを走る車の音も途切れ／＼である。おう寒やのと、掻き合す袖も冷く、茶室の風爐に沸る湯の音が、折からの風情を添へる。

て晴天よりも雨天を多しとする。梅雨季は云ふに及ばず、軒の玉糸よりも細き春雨、馬の背を分けるてふ夕立、變り易い秋の雨。特に



八 阪 の 塔

八阪
八阪神社、一
に祇園社のあ
る處。

清水

清水寺。

黒谷

黒谷光明寺。

東寺

京都九條に在
る眞言宗の本
山。

建禮門院

高倉天皇の皇
后、安徳天皇
の御母、平清
盛の女。平氏
西海に滅亡の
後京都に遷啓、
御年五十七で
崩。

京は水蒸氣の都。霞となり靄となり、煙雨墨を潑して、八阪、清水、黒谷、東寺の古塔其の間に隠見し、紛々たる雪となつては、圓山に遊人を誘ふ。流石は京は風流の都であるが、水蒸氣がその風流を助けること少くはない。

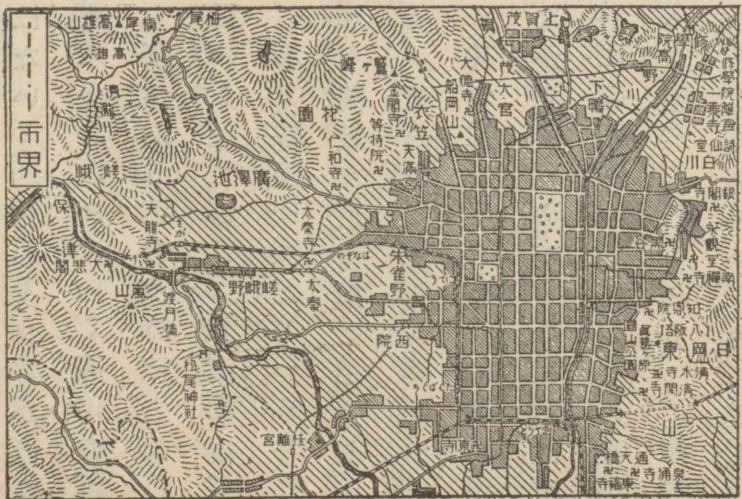
「つれづれと降り暮して、蕭やかなる宵の雨に、殿上にもをさく人少に、御とのみ所もれいよりは長閑なる心ちするに」とある源氏帚木の氣分は、如何にも雨夜の物語にふさはしい。建禮門院が東山の麓吉田の里の御佗住居は、平家物語に「壁に背ける殘の燈の影かすかに、夜もすがら窓打つ暗き雨の音ぞ、淋しかりける。」とある如く、榮華の舊夢をも結ばせ給はて、五月の短夜を明しかねさせ給うたのであつた。芙蓉の麗質、未央の柳眉、しかも一天萬乗の君の御生母にてましましながら、あまねく人生の悲痛哀苦を嘗めさせられたのである。嘗ては雨の日を管絃の御宴に打興じ、雨の夜を詩歌の御道に短しと

春めきて
元祿時代の大
阪の光景。

白雄
號は春秋庵。
信濃の人。寛
政三年歿。
北溟
伊人。各務支
考の門人。

かこち給うたのであつたが、今降る雨は、もと降れる雨とは異なつてゐたのである。

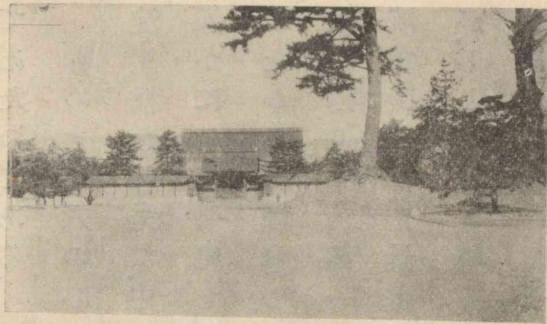
「春めきて人の心も見えわたる
淀屋橋を越えて、中の島の景色、雲
靜かにして風絶え、福島川の蛙聲
ゆたかに、雨は傘のしめりもやら
ぬ程ふりて「西鶴一代女」とあるは、
淡雲微雨の光景畫の如くである
が、しとくと降る春雨も、江戸に
なると陽氣で賑やかで、白雄の「春
雨の心ながくもふる日哉」や、北溟
の「春雨や四條五條の塗木履」のしつとりと悠長なのよりは、寧ろ大江



大江丸
大伴氏。大阪
の人。文化二
年歿。
幾人か
内藤文章の句。
日の岡
京都市の東南
隅に當る郊外
の地。

丸の「春の雨芝居の櫻咲きにけり」の趣が似つかはしい。

時雨情緒は固より江戸の風物ではない。「釣柿の夕日ぞかはる北



御苑

時雨」と言ひ、「幾人か時雨かけぬく瀬田の橋」と言ひ、「日の岡や京へふり込む夕時雨」と云ひ、何れも京洛附近の景色である。春雨は陽氣なうちに静かであり、時雨は慌だしいうちに淋しい。いづれも閑寂な京の都に相應しい自然現象である。その中に住む人がしつとりとして静かに、其の裡に生じた文學藝術が華やかでありながら、落着のあるのは當然である。東寺の塔に時雨が降つて、銀杏の葉がはら／＼と飜れるのを見た時には、淡い哀愁が感じられる。亡び行く平家の末路を見るがやうに、しつとりとして淋しいうちに美しさを

御苑

京都御所内の

御苑。

巢林子

近松門左衛門
の號。

京傳

戯作者。本名

岩瀬醒。文化

十三年歿、五

十六。

馬琴

小説家。雜學

者。本名瀧澤

解。嘉永元年

歿、年八十二。

其角

榎本又實井氏。

江戸の俳人。

寶永四年歿。

覺えざるを得ない。春雨が御苑の芝生に音もなくしと／＼と降るのを見ると、倭繪を繰展げたやうな、静かな美しい匂がしんみりと深い。一篇の源語は、正に此の春雨の情緒である。巢林子及び西鶴の文學とは全然異なつてゐる。まして京傳・馬琴とは生れも育ちも違ふ。

春雨は歌趣味であり、夕立には俳趣味が横溢する。時雨には歌趣味もあり、俳趣味もあるが、時雨の俳趣味は芭蕉の趣味で、其角の趣味ではない。

春雨は香の趣味であり、時雨は茶の趣味である。伽羅・沈香の香は床しくも靜かに立迷ふ。松風の音は端然と心耳を澄まさせる。香の趣味には王朝の匂があり、茶の趣味には東山時代の響がある。美人、香を聞くは土佐繪の色彩で、雅客、茶を味はふは墨畫の趣である。

私は本法寺に三巴の庭を音づれた。四明ヶ嶽には雨雲低く徂徠

本法寺

日蓮宗の寺、
上京區本法寺
前町にある。

四明ヶ嶽

比叡山中の最
高峯。

本阿彌光悅

諸種の藝術に
達した人。寛
永十四年歿、
年八十。

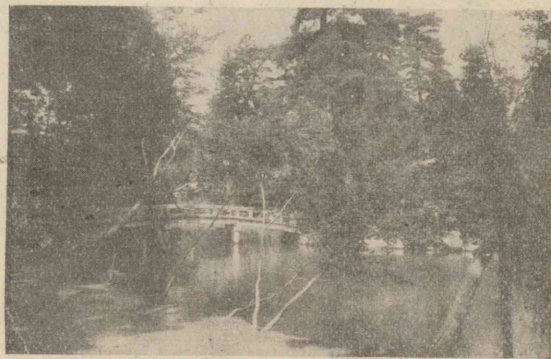
永觀堂

淨土宗の寺、
京都東山に在
る。

相阿彌

書畫・詩歌・香
茶・造庭等の
妙手。足利義
政に愛せられ
た。

し、大路・小路の軒には、時雨の點滴がたばしつてゐた。大きな伽藍の縁側に佇んだ時は、寒さが腸に浸み入るやうに覺えた。案内してくれた僧の素足も寒げに見えた。庭は本阿彌光悅が數奇を凝らした、謎のやうな結構である。その樹と石と砂とを潤して、時雨は降つたり止んだりしてゐた。又秋雨にそぼぬれながら、永觀堂に紅葉を觀に行つた事があつた。傘さしながら、立寄る人もない池のほとり、飽くまでも色づいた秋色を又なく面白くと見た。其の歸るさには銀閣寺に立寄つて、一椀の苦茗に相阿彌の作つた庭を心ゆくまで眺めた。洛中洛外は私の最も好む所の境である。雨に逢ふ毎に、雨の都の



永觀堂

美觀を心ゆくまで眺める。雨は陰氣で鬱陶しいが、閑寂を味はふには又なく善い。雨の都に於て一層此の感を深くする。殊に春雨に於て、時雨に於て。「現代隨筆大觀の文に據る

二 花月草紙抄

松平定信

松平定信
白河城主。號
樂翁。文政十
二年歿、年七
十一。

月の夜半こそ思ふ隈もなく、心の底も澄みわたりぬるものなれ。されど闇の夜の空晴れて星の光さやかなるに、風高く吹きかふは、またまさりぬるやうにおぼゆるといへば、雨ぞいとまさりぬるをといふ。いかにと問へば、いでや旱の雨はさらなり、草木の花咲き實のるも、皆この恵にこそあなれ。またその感情の深さをいはば、今日は元日なりけりといふに雨そぼふりて霞みわたりたるは、げに春かなとぞおもふめる。師走の晦のどやかに降りたるも、春待ち顔にていとをかし。すべて春は雨こそそのどかなれ。軒端より霞み渡りていと

こまやかに降れるが、衣うるほせども降るとは見えぬ。軒の玉水も
間遠に音して、住捨てし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭の面の枯生の底
に緑や、添ひ行くも、柳の絲の動きもやらで露添ふも、ともにいと長
閑なれ。燈火挑げても何となく光しめりたるに、鐘の音のほのかに



松平定信

響きくるも心澄みわたりぬるものぞか
し。その外、梅が香のしめり、夜深くにほ
ひわたるも花にうしとかこちぬるもあ
はれはありけり。春も老い行くころ、蛙
の時得がほにすだくもをかし。

時鳥の初音いかにと思ふころ、村雨の
はらくくと降り出でたるも、五月雨の幾日も降りくらしして、ふみの巻
巻繰返しつゝ、ゐたれば、何となく世の中の事にも遠ざかりぬる心ち
ぞする。また暑さに堪へかぬるころ、雲のみなぎり出づる勢ありて、

さよかぜにし
ばしおくれ
ちる音はそら
にたゞよふこ
のほなるらむ
樂翁

風ひとしきり吹落ちたるに柳蓮葉なんどの葉裏白く見せたるも涼
し。やがておほきやかなる雨の間遠に落ちたるが、後にはしきりに
降りきて物音もきこえず、土のほひきたるもいと心ちよし。軒端
は玉の簾懸けたらんやうに、玉水の絶えまなく落ちたるに、庭はひと
つ湖となりて、あるは瀧おとし、または水走らせたるに、人々しばし物
言はでうちまも
りゐたるもをか
し。やゝ雲うす



松平定信筆蹟

くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭に躍り出で
て餌拾ふさまなり。はじめ雲の立出でしかたは、はや空の一しほ、緑
に見えて虹など見ゆるに、木々の緑の庭濼に影見ゆるもいと涼し。
老いたる女など、雷の音に驚きて這出でたるが、今日のは若かりしと
きのごとよく霽れにけり、今時のはかく霽るゝことまれなりなど、は

や繰言いふもあり。かれはかくあわてしなどいひて、かたみに笑ひとよみつゝ、今日は蚊も少かるべし。雷の音もいとかすかなり。このごろの暑さも忘れぬとて、端近う出づれば、夕月の光さしわたりて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙の物待ちがほに空打睨みて、ふつゝかなる音になくもをかし。

秋來るころの雨は昨日にかはりて何となうさびし。萩の上風、外山の鹿の音など、月よりも身にしむ心地ぞする。常に聞きなれし筧の水の音までもあはれ深くこそ。月の前の村雨もまたをかし。まいてや、夜寒のころ鳴きからしたる蟲の音の、雨のをやみにかすかなる聲して枕近く鳴きよるもあはれなり。この雨に木々も染みなんと思へば、茸なども生ひいでなん。栗もはや落つべし。など、童べのものさびしげに燈火にむかひつゝ、言ひいづるも、げにさまざまなり。紅葉の染めそふも、白菊のうつりゆきてひとさかり見するも、尾

花の露重げにうち萎れたるに龍膽のうらみ深く咲きたるあたりもつきくし。朝顔のみな枯れたる中にさゝやかに赤う咲出でたるが、晝過ぐるまで凋み後れたる、又あはれなり。

野分の風は、おどろしきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがにあはれをそふるは秋のならひなるべし。時雨のさと音して夕日に白く降りくるもまた音かへて枕とふも、をかし。月よりも闇の夜よりもあはれ深きものには侍らずやといへば、かうやうにいひならべては、げにもといふべからんが、一年もふるこゝちしてよみ見れば、この雨は一昨日より降りいでしをと思ふ心はかはらじと、心の中に思ひて聞きぬしもまたをかしかりけり。〔花月草紙〕

三 夕ぐれの時

堀口大學

夕ぐれの時はよい時

堀口大學
詩人。明治二十五年東京市生。

かぎりなくやさしいひと時。

序詩

それは季節にかゝはらぬ、

冬なれば煖爐のかたはら、

夏なれば大樹の木かげ、

それはいつも神祕に満ち、

それはいつも人の心を誘ふ、

それは人の心が、

ときに、しばし、

静寂を愛することを、

知つてゐるもののやうに、

小聲にさゝやき、小聲にかたる……

夕ぐれの時はよい時、
かぎりなくやさしいひと時。

若さにほふ人々のためには……

それは愛撫に満ちたひと時、

それはやさしさに溢れたひと時、

それは希望でいつばいなひと時、

また青春の夢とほく

失ひはてた人々のためには、

それはやさしい思ひ出のひと時、

それは過ぎ去つた夢の酩酊、

それは今日の心には痛いけれど、

しかも全く忘れかねた

そのかみの日のなつかしい移り香。

夕ぐれの時はよい時、

かぎりなくやさしいひと時。

夕ぐれのこの憂鬱は何處から來るのだらうか。

だれもそれを知らぬ！

(おゝ！ だれが何を知つてゐるものか？)

それは夜とともに密度を増し、

人をより強き夢幻へみちびく……

夕ぐれの時はよい時、

かぎりなくやさしいひと時。〔詩集月光とピエロ〕

阿佛尼

歌人。藤原爲家の後妻。弘安六年歿、年不詳。

ふみの名

孝經。

みづぐきの岡
みづぐきの岡のくづ葉を吹きかへしおも知る見らが見えぬころかも。(古歌)

神樂の詞

あはれあなおもしろ、あなたのし、あなさやけ、おけ。

世を治め

紀貫之の古今集の序にある。

四 いさよふ月

阿 佛 尼

むかし、壁の中より求めいでたりけむふみの名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身の上のこととは知らざりけりな。みづぐきの岡の葛葉、かへすくも書置くあとたしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。また賢王の人を捨て給はぬまつりごとにも漏れ、忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるゝものは、數ならぬ身ひとつなりけりと思ひ知りながら、またさてもあらで、なほこのうれへこそやる方なく悲しけれ。

さらに思ひつゞくれば、やまと歌の道は、たゞまことすくなく、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらむ。日本の國に、天の岩戸ひられし時、よもの神だちの神樂の詞をはじめて、世を治め物をやはらぐるなかだちとなりけるとぞ、この道のひじりたちは記し置かれ

二たび勅を
藤原定家新古今集と新勅撰集とを撰し、其の子爲家も亦續後撰集と續古今集とを撰した。

三人のをの子

俊成 定家
爲家 爲氏
爲教
爲顯 此の三
爲相 人阿佛
爲守 尼の出

細川

播磨國美囊郡

細川庄。

子と思ふ

人の親の心は
闇にあられど
も子と思ふ道
に感ひぬるか
な。(平兼輔)
あづま
鎌倉幕府。

たりける。

さても又集をえらぶ人はためし多かれど、二たび勅を受けて、世々にきこえあげたるは、たぐひなほあり難くやありけむ。そのあとに



尼 佛 阿

しもたづさはりて、三たりののをの子どもも、ちの歌のふる反古どもを、いかなるえにかありけむ、あづかりもたることあれど、道をたすけよ、子をはぐくめ、後の世をとへとて、深き契をむすび置かれし細川のながれも、ゆゑなくせきとめられしかば、あととふ法のともし火も、處をまもり家をたすけむ親子の命も、もろ共いきえをあらそふ年月を経て、あやふく心ほそきものから、何としてつれなく今日まではながらふらむ。惜しからぬ身ひとつはやすく思ひすつれども、子と思ふ心の闇はなほ忍びがたく、道をかへりみるう

らみはやらむ方なく、さてもなほあづまの龜の鑑にうつさば、曇らぬ影もやあらはるゝと、せめて思ひ餘りて、よろづのはかりを忘れ、身をえうなきものになしはてて、ゆくりもなくいさよふ月にさそはれいでなむとぞ思ひなりぬる。

み冬立つはじめの、さだめなき空なれば、ふりみふらずみ時
ころはみ冬立つはじめの、さだめなき空なれば、ふりみふらずみ時
雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ涙とともにみだれ散りつゝ、事に
ふれて心ほそく悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いき憂しとても
とままるべきにもあらで、なにとなくいそぎ立ちぬ。目かれせざり
つるほどだに、荒れまさりつる庭もまがきも、ましてと見まはされて、
したはしげなる人々の袖の雫もなぐさめかねたる中にも、侍従大夫
などのあながちにうち屈したるさま、いと心苦しければ、さまゝい
ひこしらへぬ。

代々に書置かれける歌の草紙どもの奥書などして、あだならぬか

み冬立つはじめ
建治三年十月。
北條時宗の執
権時代。
人やりならぬ
人やりの道な
らなくに大方
はいきうしと
いひていざ歸
りなむ。(源實)
侍従
爲相。冷泉家
の祖。當時十
五歳。
大夫
爲守。後出家
して曉月と云
ふ。當時十三
歳。

ざりをえりしたゝめて、侍従のかたへ送るとて、書添へたる歌。

和歌の浦にかきとゞめたる藻鹽草

これを昔の形見とも見よ

あなかしこ横浪かくな濱千鳥

一方ならぬあとを思はば

これを見て、侍従のかへりごといと疾くあり。

つひによも仇にはならじ藻鹽草

かたみをみよの跡にのこせば

迷はまし教へざりせば濱千鳥

一方ならぬ跡をそれとも

このかへりごといとおとなしければ、心やすくあはれなるにも、昔の人に聞かせ奉りたくて又うちしをれぬ。大夫の、傍去らず馴れ來つるを振捨てられなむ名殘、あながちに思ひ知りて、手習したるを見れば、

ば、

はるくくとゆくさき遠く慕はれて

いかにそなたのそらを眺めむ

と書きつけたるものよりことにあはれにて、同じ紙に書添へつ。

つくくくと空な眺めそこひしくば

道とほくともはやかへりこむ

とぞ慰むる。「十六夜日記」

五 菅公の配流

右大臣才も世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきても殊の外にかしこくおはしまし、左大臣は御年も若く、才も殊の外に劣り給へるにより、右大臣御おぼえ殊の外におはしましたるに、左大臣安からず思したる程に、さるべきにやおはしけん、右大臣の御ためよから

右大臣
菅原道真。
左大臣
藤原時平。

昌泰四年
昌泰は醍醐天皇の年號。此の年延喜と改元。

ぬ事いできて、昌泰四年正月二十九日、太宰權帥になし奉りて流され給ふ。この大臣の子どもあまたおはせしに、女君達は婿どりし、男君達は皆ほど／＼につけて、位どもおはせしを、それも皆かた／＼に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君、女君たち、慕ひ泣きておはしければ、ちひさきはあへなんと、おほやけも許さしめ給ひしかば、共にゐて下り給ひしぞかし。みかどの御おきて極めてあやにくにおはしませば、この御子どもを同じかたにだに遣はさざりけり。かたがたにいと悲しくおぼして、御前の梅の花を御覽じて、

こち吹かばにほひおこせようめの花

あるじなしとて春を忘るな

また亭子のみかどにきこえさせ給ふ、

流れゆく吾はみくづとなりはてぬ

君しがらみとなりてとゞめよ

亭子のみかど
醍醐天皇の父
帝宇多天皇。

山崎
山城國乙訓郡。

なき事により、かく罪せられ給ふを思し歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。その程きはめて悲しきこと多かり。日ごろ經て都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿のこずゑをゆく／＼と

隠るゝまでもかへりみしはや

また播磨國におはしつきて、明石のうまやといふ處に御やどりせしめ給ひて、うまやの長のいみじう思へるけしきを御覽じて、作らしめたまへる詩いとかなし。

驛長無驚時、變改。一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしましつきて、あはれに心細くおぼさるゝ夕、をちかたに處々煙立つを御覽じて、

夕ざれば野にも山にも立つ煙

なげきよりこそもえまさりけれ

また雲の浮きてたゞよふを御覽じて、
山わかれ飛びゆく雲の歸りくる

さりととも世をおぼしめされけるなるべし。月
のあかき夜、
かげ見るときぞなほ頼まる、

海ならずたゞよふ水のそこまでも

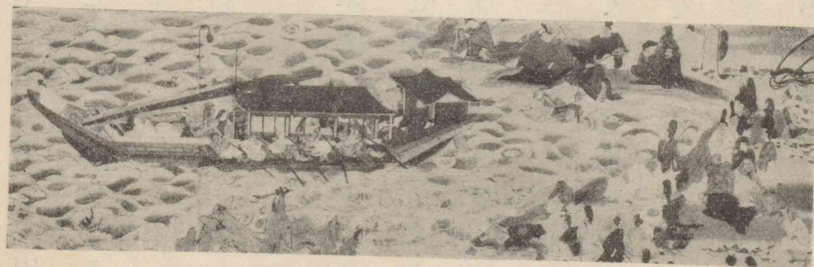
きよきこゝろは月ぞてらさん

これいとかしこく遊ばしたりかし。げに月日こ

そはてらし給はめとこそはあめれ。

まことにおどろくしき事はさるものにて、か

くやうの歌や詩などをさへいとなだらかに、ゆゑ
ゆゑしういひつゞけ給ふと、見聞く人、目もあやに
あさましくあはれにまもり居たり。物のゆゑ知



流配の公菅

月日こそは
禮記の「天無私覆、地無私載、日月無私照。」に據る。
まこと
こゝまでは大宅世嗣と云ふ此の物語する老人の詞であつて、まことに云々からはそれを聽いてゐる人の感歎の詞で、即ち記者の筆である。

繁樹

夏山繁樹といふ老人で、前の世嗣の相手。筑紫に又世嗣の詞になる。

大貳

太宰大貳。當時は藤原興範。

觀音寺

天智天皇の御草創。

文集
白氏文集。



(詞繪起緣神天野北)す拜を衣御

りたる人なども、むげに近く居よりて、外目せず見聞くけしきどもを見て、いよくはへて物をくり出すやうに言ひつゞくる程ぞ、誠にけうなるや。繁樹、涙をのごひつゞけうじ

あたり。

筑紫におはします所の御門もかためておはします。大貳の居どころは遙かなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやられけるに、又いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色。觀音寺只聽鐘聲。

これは文集の白居易の、遺愛寺鐘欵枕聽香爐峰雪撥簾看。といふ詩にもまさりざまに作らしめたまへりところ、昔の博士どもは申し

九月のこよひ
昌泰三年九月
九日。

けれ。又かの筑紫にて、九月十日菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましし時、九月のこよひ、内裏にて菊の宴ありしに、このおとゞ作らしめ給へりける詩を、帝かしく感じ給ひて、御衣たまはり給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽するに、いとゞそのをりおぼしめし出でて作らせ給ひける。

去年、今夜侍、清涼。秋思、詩篇獨、斷腸。

恩賜、御衣今在此。捧持、毎日拜、餘香。

この詩いとかしく、人々感じ申されき。此の事どもたゞちりぢりなるにもあらず。かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを、書きあつめ、一卷とせしめ給ひて、後集と名づけられたり。又をりくゝの歌書きおかせ給へりけるを、おのづから世に散りきこえしなり。世繼が若う侍りしとき、この事のせめてあはれに悲しく侍りしかば、大學の衆どもの生不學には、いますかりしを問ひたづね、語らひとりて、

後集
菅家後集。

又雨のふる日

又世嗣の詞。

大鏡

文徳天皇から
後一條天皇ま
で十四代の事
を記した歴史。
藤原爲業
の著といふ。

倫敦塔

ロンドン市内
古建築の一。
第十一世の築
造に始まり、
数次の増築を
経て二十の塔
岩の集合をつ
くつてゐる。
その一部は皇

さるべき餌袋わりごやらの物調じて、うち具してまかりつゝならひとりて侍りしかど、老のけのはなはだしき事は、皆こそ忘れ侍りにけれ。これはたゞ頗る覺え侍るなりといへば、聞く人々、げにくゝいみじきすきものにも物し給ひけるかな。今の人はさる心ありなんや」と感じあへり。

又雨のふる日うち詠め給ひて、

あめのしたかわけるほどのなければや

着てし濡衣ひるよしもなき

やがてかしこにて失せ給へり。〔大鏡〕

六 倫敦塔

夏 目 漱 石

倫敦塔の歴史はポーション塔の歴史である。ポーション塔の歴史は悲惨の歴史である。十四世紀の後半に、エドワード三世の建立

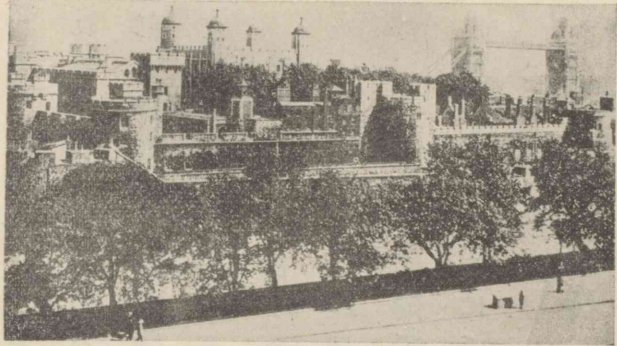
居となつたこ
ともあり、又
罪囚となつた
皇族名士など
の拘禁惨殺さ
れた牢獄でも
あつた。

夏目漱石

小説家、英文
學者。名は金
之助。東京の
人。大正五年
歿、年五十。

ボーション塔

多数の塔中最
も悲劇的な塔
の名。最初ウ
オリック伯ト
マス・ホーン
ヤン(Thomas
Beauchamp)
が幽閉された
ので此の名が
ある。其の陰
惨な壁の上に
は、或は冤を
訴へ、或は人
を恨み、或は
死後の福を祈
つた文句が、



倫敦塔

にかゝる。この三層塔の一階室に入るものは、その入るの瞬間に於て、百代の遺恨を結晶したる無数の記念を、周囲の壁上に認むるであらう。凡ての怨、凡ての憤、凡ての憂と悲みとは、この怨、この憤、この憂と悲みの極端より生ずる慰藉と共に、九十一種の題辭となつて、今に猶觀る者の心を寒からしめて居る。冷やかなる鐵筆に無情の壁を彫つて、わが不運と定業とを天地の間に刻みつけたる人は、過去といふ底なし穴に葬られて、空しき文字のみいつまでも娑婆の光を見る。彼等は強ひて自らを愚弄するにあらずやと怪しまれる。世に反語といふがある。白といつて黒を意味し、小と唱へて大を思はしむ。凡ての反語のうち、自ら知らずして

指の爪で印刷
せられてあ
る。
エドワード三
世
エドワード二
世の子。一三
一二—一三七
七年。

後世に残す反語ほど猛烈なるはまたとあるまい。墓碣といひ、記念碑といひ、賞牌といひ、綬賞といひ、是等が存在するかぎりには、空しき物質にありし世を偲ばしむるの具となるに過ぎない。我は去る、我を傳ふるものは残ると思ふは、去る我を傷ましむる媒介者の残る意にて、我その物の残る意にあらざるを忘れたる人の言葉と思ふ。未來の世まで反語を傳へて泡沫の身を嘲る人のなす事と思ふ。余は死ぬ時に辭世も作るまい。死んだ後は墓碑も建てて貰ふまい。肉は焼き、骨は粉にして、西風の強く吹く日、大空に向つて撒き散して貰はうなどと、入らざる取越苦勞をする。

題辭の書體は固より一様でない。あるものは閑に任せて丁寧な楷書を用ひ、あるものは心急ぎてか、口惜しまぎれか、がり／＼と壁を搔いて擲り書に彫付けてある。又あるものは自家の紋章を刻み込んで、その中に古雅な文字を留め、或は楯の形を描いてその内部に讀

難き句を残して居る。書體の異なるやうに、言語も亦決して一樣でない。英語は勿論の事、伊太利語も、羅旬語もある。こんなものを書く人の心は、どの様であつたらうと想像して見る。凡そ世の中に、何が苦しいといつても、所在のないほどの苦みはない。意識の内に變化のないほどの苦みはない。使へる身體は目に見えぬ繩で縛られて、動きのとれぬほどの苦みはない。生きるといふは活動して居るといふ事であるに、生きながらこの活動を抑へられるのは、生といふ意味を奪はれたのと同じ事で、その奪はれたのを自覺するだけが、死よりも一層の苦痛である。この壁の周圍をかくまで



倫敦塔番人

塗抹した人々は、皆この死よりも辛い苦痛を嘗めたのである。忍ばるゝかぎり、堪へらるゝかぎり、この苦痛と戦つた末、居ても起つてもたまらなくなつた時、始めて釘の折や、鋭き爪を利用して、無事の内に仕事を求め、太平の裏に不平を洩らし、平地の上に波瀾を畫いたものであらう。彼等が題した一字一畫は、號泣涕淚、その他すべて自然の許すかぎりの排悶的手段を盡くした後、猶飽くことを知らざる本能の要求に餘儀なくせられた結果であらう。

又想像して見る。生まれて來た以上は、生きねばならぬ。死を怖るゝといはず、だゝ生きねばならぬ。生きねばならぬといふは耶蘇、孔子以前の道で、又耶蘇、孔子以後の道である。何の理窟も入らぬ、只生きたいから生きねばならぬのである。すべての人は生きねばならぬ。地獄に繋がれた人も、亦この大道に従つて生きねばならなかつた。同時に彼等は死ぬべき運命を眼前に控へて居つた。如何に

せば生き延びらるゝであらうかとは、時々刻々、彼等の胸裏に起る疑問であつた。一たびこの室に入るものは必ず死ぬ。生きて再び天日を見たものは千人に一人しかない。彼等は遅かれ早かれ死なねばならぬ。されど、古今に互る大眞理は、彼等に誨へて生きよといふ、飽くまでも生きよといふ。彼等は已むを得ず、彼等の爪を磨いた。尖れる爪の先を以て堅き壁の上に一と書いた。一を書いた後、眞理は古の如く生きよと囁く、飽くまでも生きよと囁く。彼等は剥がれた爪の癒えるのを待つて再び二と書いた。斧の刃に、肉飛び骨摧くる明日を豫期した彼等は、冷やかな壁の上に、只一となり、二となり、線となり、字となつて生きんと願つた。壁の上に残る縦横の疵は、生を欲する執着の魂魄である。余が想像の絲をこゝまで手繰つて來た時、室内の冷氣が、一度に背の毛穴から身の内に吹込むやうな感じをして、覺えずぞつとした。

ジェーン・グレー

Lady Jane

Grey. イギリス王ヘンリー七世の曾孫。攝政ノーサンランド公野心を抱き、強ひてグレーを己の子に嫁せしめ、幼主エドワード六世に迫つてこれを後嗣となさしめた。王殂し、グレー女王となる。時にヘンリー八世の女メリー王位に即き、グレー及びその夫を捕へて獄に投じ、後これを殺す。在位僅かに九日。後人その天死を傷んで詩文の題材とするものが多い。一五三七—一五五四年。

氣味が悪くなつたから、通り過ぎて先へ抜ける。銃眼のある角を出ると、滅茶々に書綴られた模様だか文字だか分らない中に、正しい畫で、小さく、ジェーンと書いてある。余は覺えずその前に立留つた。英國の歴史を讀んだもので、ジェーン・グレーの名を知らぬ者はあるまい。又その薄命と無残の最後とに同情の涙を濺がぬ者はあななくして惜し氣もなく刑場に賣つた。蹂み躪られたる薔薇の莖より、消難き香の遠く立ちて、今に至るまで史を繙く者をゆかしがらせる。余はジェーンの名の前に立留つたきり動かない、といふよりむしろ暫く動けなかつた。〔倫敦塔〕

貞徳
松永氏。京都
の人。承應二
年歿。

貞室
安原氏。貞徳
の高弟。寛文
十一年歿。

季吟
國學者、歌人。
北村氏。近江
の人。寶永二
年歿。

宗因
檀林風の俳人。
西山氏。肥後
の人。天和二
年大阪に歿。

神樂
明らげき日の
本達し神々樂
宗因

西鶴
浮世草子の作
者。井原氏。元
祿六年歿。

七 江戸時代の俳句 (下)

一

山や故郷にしき着てゆく入日影 貞徳

これはくとはかり花の吉野山 貞室

まざくと在すがごとし魂祭 季吟

松に藤蛸木にのぼるけしきあり 宗因



松永貞徳

白露や無分別なるおきどころ
長持に春かくれゆく衣がへ
鯛は花は見ぬ里もあり今日の月

西鶴

西鶴
雲のみれや山
見ぬ國の拾ひ
物

鬼貫
上島氏。伊丹
の人。元文三
年歿。

鬼つら
おしぬぐひお
しぬぐひゆく
月の雲

言水

池西氏。奈良
の人。享保四
年歿。

芭蕉
松尾氏。伊賀
の人。元祿七
年歿。

音
ふる池や蛙飛
(び)む水の
音はせむ



西鶴筆蹟

によつぼりと秋の空なる富士の山 鬼貫



鬼貫筆蹟

木枯の果はありけり海の音 言水

二

四方より花吹き入れて鳩の海 芭蕉

草臥れて宿かる頃や藤の花 蕉

ふる池や蛙飛
音はせむ

素堂
山口氏。甲斐
の人。享保二
年歿。

素堂
ズツシリと南
瓜落(ち)て秋
さびし

其角

榎本又寶井氏。
江戸の人。寶
永四年歿。

雨冷に羽織を
夜の裳ならん
其角

ほろ／＼と山吹散るや瀧の音
しづかさや岩にしみ入る蟬の聲
初時雨猿も小蓑をほしげなり
枯枝に烏のとまりけり秋の暮
猪も共に吹かるゝ野分かな
目に青葉山郭公初松魚



蹟筆堂素

素

堂

鶯の身を逆さまに初音かな
稻妻やきのふは東けふは西



蹟筆角其

其

角

嵐雪

服部氏。淡路
の人。寶永四
年歿。

許六

森川氏。彦根
の人。正徳五
年歿。

去來

向井氏。長崎
の人。寶永元
年歿。

支考

各務氏。美濃
の人。享保十
六年歿。

丈草

内藤氏。尾張
の人。元祿十
七年歿。

名月や疊の上に松の影



角其本榎

梅一りん一りんほどのあたゝかさ

嵐

雪

黄菊白菊その外の名はなくもがな

十團子も小粒になりぬ秋の風

許

六

何事ぞ花見る人の長刀

去

來

湖の水まさりけりさつき雨

白雲や垣根をわたる百合の花

支

考

わが事と鱒の逃げし根芹かな

丈

草

北枝
立花氏。加賀
の人。享保三
年歿。
凡兆
氏名、歿年不
詳。號春花岡。
芭蕉の門人。
金澤の人。
惟然
廣瀬氏。美濃
の人。正徳元
年歿。

時鳥なくや湖水のさゝにこり
草の葉におくや残暑の土埃
下京や雪積む上の夜の雨
長々と川一すぢや雪の原
別るゝや柿食ひながら坂の上

北枝
凡兆
惟然

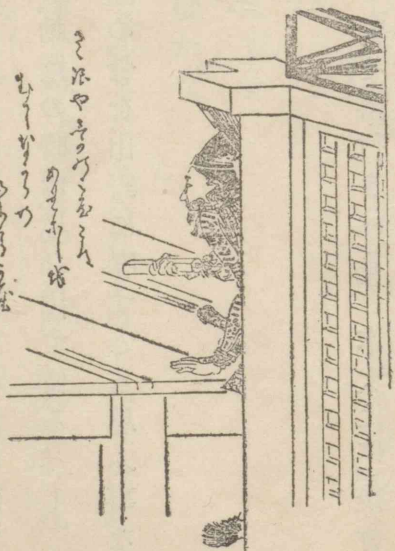
八 忠度の都落

薩摩守忠度と申すは、入道の舍弟なり。淀の河尻迄下りたりけるが、郎等六騎相具して、忍びて都に歸り上る。如法夜半の事なるに、五條三位俊成卿の宿所に行きて門を叩く。内には是を聞きけれども、かゝる亂の世なる上、いぶせき夜半の事なれば、敲けどもく開かざりけり。餘りに強く敲きければ、良久しく有つて、青侍を出し、戸を開かせて是を問ふ。「忠度と申す者、見參に申し入れたき事ありて參り

入道
淨海入道平清
盛。
俊成卿
藤原氏。當時
の歌道の大家。

たり。」と答へければ、三位大庭に下り、世に恐れて内へは入れざりけれども、門をば細目に開きて對面あり。忠度宣ひけるは、「かゝる身として御爲憚あれども、所詮一門榮華盡きて都に安堵せず、西海へ落ち下り侍り。亡びん事疑なし。

世静まりて後、定めて勅撰の沙汰候はんか。たとひ身は八重の鹽路の底に沈むとも、藻鹽草書置く末の言の葉、後の世までも朽ちぬ形見に傳はり侍れかしと思ひ出でて、河尻より忍び上つて侍り。これぞ年頃讀み集めたりし愚詠どもにて侍る。身と共に波の下にみくづとなさん事遺恨に侍り。是を砌下に進らせ置



忠度俊成を訪ふ

き候。勅撰の時は必ず思召し出でよ。」とて、卷物一卷泣くく鑑の

引合より取出したり。

三位感涙を流して是を受取り、御詠一卷預り置き候ひ畢んぬ。是永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南ならんか。此の忽劇の中に御音信に預る事、恐悦少からず候かな。たとひ浮生を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓に納めて、勅撰の時は、思ひ出て侍るべし。」と宣へば、忠度今は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも思ふ事なしとて、馬に乗り、古詩を、

前途程遠

大江朝綱が、

「於鴻臚館」

「饒北客」序

の中の語。

前途程遠、馳思於雁山之暮雲。

後會期無、霑纓於鴻臚之曉淚。

と打上げく詠じつ、南を指してぞ落行きける。本文には、後會期遙」と書きたるを、忠度還り見るべき旅ならず、今を限りの別なりと思ひければ、後會期無。」と詠じけるこそあはれなれ。三位も残りの惜しくして遙かにこれを見送りても、あはれ世に在りしには、此の人

どもにこそ諂ひ追従せしに、替る習とて、今は門を隔つる事の悲しさよ。」と、哀なるにも涙、優なるにも涙、忍びの袖をぞ絞られける。

代靜まりて後、千載集を撰まれけるに、忠度の此の道を嗜み、河尻より上りたりし志を思ひ出て給ひて、故郷の花といふ題に「讀人しらず」とて一首入れられたり。

さゝ浪や志賀の都は荒れにしを

昔ながらの山櫻かな

とよめる歌なり。名字をも顯し、あまたも入れまほしかりけれども、朝敵となれる人のわざなれば、憚り給ひて、只一首ぞ入れられる。亡魂いかに嬉しく思ひけん。哀にやさしくぞ聞えし。「源平盛衰記

源平盛衰記

應保から壽永

まで二十餘年

間。源平二氏

に係る軍記。

葉室時長の作

といふが詳で

ない。

千載集

後白河法皇の

時、藤原俊成

の撰した歌集。

九 敦盛最期の事

さるほどに一の谷の軍破れしかば、武藏の國の住人熊谷の次郎直

實、平家の公達の助船に乗らんとて、汀の方へや落ちゆき給ふらん。あつばれよき大將軍に組まばやと思ひ、細道にかゝつて、汀の方へ歩まする所に、こゝに練緯に鶴縫うたる直垂に、萌黄匂の鎧着て、鉞形打つたる兜の緒をしめ、金づくりの太刀を佩き、二十四さいたる斑生の矢負ひ、滋藤の弓持ち、連錢葦毛なる馬に、金覆輪の鞍おいて乗つたりける者一騎、沖なる船に目をかけ、海へさつと打入れ、五六反ばかりぞ泳がせける。

熊谷「あれはいかに、よき大將軍とこそ見參らせて候へ。まさなるも敵に後を見せ給ふものかな。かへさせ給へ、かへさせ給へ。」と、扇をあげて招きければ、招かれて取つてかへし、汀に打上がらんとし給ふ所に、熊谷、波打際にておしならべ、むずと組んで、どうと落ち、取つておさへて、首をかゝんとて、兜をおし仰のけて見たりければ、薄化粧して鐵漿黒なり。わが子の小次郎が齡ほどして、十六七ばかんなるが、

容顔まことに美麗なり。「そもいかなる人にてわたらせ給ひ候やらん、名のらせ給へ。助けまゐらせん。」と申しければ、まづかういふ和殿は誰ぞ。「ものその數にては候はねども、武藏の國の住人熊谷の次郎直實」と名のり申す。「さては汝がためにはよい敵ぞ。名のらずとも、首取つて人に問へ。見知らうざるぞ。」とぞのたまひける。

熊谷、あつばれ大將軍や、この人一人討ち奉りたりとも、負くべき軍に勝つべきやうなし。また助け奉りたりとも、勝軍に負くることもよもあらじ。けさ一の谷にて、わが子の小次郎が、薄手負うたるをだにも、直實は心苦しく思ふに、この殿討たれ給ひぬと聞き給ひて、さこそは歎き悲しみ給はんずらめ。



須磨の浦

土肥
土肥次郎實平。
梶原
梶原平三景時。

助け參らせんとて、後を顧みたりければ、土肥、梶原五十騎ばかりで出て来る。熊谷涙をはらくと流いて、あれ御覽候へ。いかにもして助け參らせんとは存じ候へども、味方の軍兵、雲霞の如くに充ち満ちて、よも遁し參らせ候はじ。あはれ同じうは、直實が手にかけ奉つて、



平 敦 盛

後の御孝養をも仕り候はん。」と申しければ、たゞ何様にも、とうとう首を取れ。」とぞのたまひける。熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀を立つべしとも覺えず。

目もくれ、心も消えはてて、前後不覺に覺えけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣くく首をぞかいてげる。

あはれ弓矢取る身ほど口惜しかりける事はなし。武藝の家に生

平家物語

軍記物語の一。
平家の榮華に始まり、その滅亡に終る。
後鳥羽天皇の御時、信濃前司行長の作と云ふ。

高山樗牛

評論家。文學博士。名は林次郎。山形縣の人。明治三十五年歿、年三十二。

れずば、何しに只今かゝる憂き目をば見るべき。情なうも討ち奉つたるものかなと、袖を顔におしあてて、さめくくとぞ泣きあたる。首を包まんとて、鎧直垂をといて見ければ、錦の袋に入れられたりける。笛をぞ腰にさゝれたる。あないとほし。この曉、城の中にて管絃し給ひつるは、この人々にておはしけり。當時味方に、東國の勢何萬騎かあるらめども、軍の陣に笛もつ人はよもあらじ。上臈はなほもやさしかりけるものをとて、これを取つて、大將軍の御見參に入れたりければ、見る人涙を流しけり。後に聞けば、修理の大夫經盛の乙子、大夫敦盛とて、生年十七にぞなられける。それよりしてこそ熊谷が發心の心は出で來にけれ。〔平家物語〕

一〇 平家雜感

高山樗牛

(一) 都落

凡そ人國の傳へ遺しし史は多かれど、平家の都落ばかり哀にもまた目ざましきはあらず。

黒股 美濃國長良川に沿ふ地。木曾 源義仲。壽永三年、十一月。

三吉野の山 三吉野の山があなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせん。(古今集、讀人不知)

故郷 故郷を燒野が

平城の餘燼未ださめず、墨股すのまたの勝鬨なほ響きぬるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡の前後に充ち満ちぬ。宇治淀の備脆くも潰えて、都も今を限とぞ見えし。あはれ一門の天下、身を置くに處なく、この世のうきに三吉野の山のあなたに隠れがもなきか。いざさらば已みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國の御幸に一旦の凌辱を忍ばせ給はんや。生死もわかぬ別路に人のあはれの限もなし。また歸り來べき都としもおもはねばにや、六波羅池殿、西八條以下、一門譜第の邸宅宿房、京白川の四五萬家をあはせて、一炬の煙となし果てぬることあわたしかりしか。こゝに鳳闕の礎むなしく残り、椒房の嵐夜々かなしむ。保元このかた天下の榮華を盡くしたる花の都の故郷を燒野の原とかへりみ

原とかへりみて末も煙の波路をば行く。(平家物語、平經盛)



平家都落

て、末も煙の波路をば行くへも知らずさすらふらん。直衣束帶の身にも今は黒金の衣をのべたれども、誰かは詠歌の餘哀になれて弓矢の譽を勵むべき。さても捨てがたき命や。今こそは世にも人にも憂かりけれ、流星は忍ばるゝ昔の様の夢に入るをば如何にせん。翠華揺々として西に向へば、秋風到る所野に満てり。あゝ昨日は東關のもとに轡を並べて十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人。行く手の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず、渚に寄する波の音、袂に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出づるさの山の端をあなたの空とおぼしけ

ん、日暮舷に笛ふく人あり、響は遠く煙波をかすめて、三軍ひとしく耳をそばだつ。嗚呼この時、この人、想果して如何。

(二) 没落

平家はさすがに名門のこととて、没落のきはまで大義名分を執りて動かざりしは、ゆゑしくもまた哀の極みなりき。木曾は兵衛佐に疎まれて、東國の討手はや途にあり。強ひて院宣請ひ受けけれども、孤軍もとより勝算無し。乃ち使を西國に立て、合體して兵衛佐討つべきよしをいひ送りぬ。平家の答はかくなりき。「よしや世は季になりぬとも、木曾などに語らはれて如何てか都に上るべき。畏くも十善の帝王、三種の神器を帶してこなたに渡らせ給ふ。須らく胄を脱ぎ、弦をはづし、來りて軍門に降るべし、さらば東國征討の御供にも加へらるべきか」と。あゝ何ぞ其の言辭の堂々として、没落のやからに類はざるや。平家にして、若し一時の權變を弄びて勢を廻ら

兵衛佐
右兵衛佐源頼朝。

さんとだに思はば、かゝる時こそ乗すべき機會なれ。さるを名分の正しきを執りて成敗の數を顧みず。若し偏へに利害の眼よりすれば、迂は則ち迂ならんも、かくして滅びんは、詬を含みて存へんよりも如何ばかり美はしかるべき。

その太宰府に落行くや、緒方の三郎使して申しけるは、まことに重代の芳恩を思はざるにあらざれども、一院の仰默し難ければ、九國におき奉るべき地も候はず」と。平大納言乃ち烏帽子直垂して出て向ひて宣ひけるは、それ我が君は天孫四十九世の正統、神武天皇より人皇八十一代に當らせ給ふ。祖宗歴代の神靈我が君をこそ守らせ給ふらめ。就中當家は保元平治以來度々の逆亂を鎮めて、九州の者共をば皆内さまへこそ召されしか。然るを何ぞや、かゝる重恩をも打忘れて、あづま夷の下知に従ふこそ奇怪至極なれ」と。嗚呼何ぞその態度の堂々たるや。

一院
後白河天皇。

平大納言
平時忠。清盛の妻の兄。
我が君
安徳天皇。文治元年崩。壽八歳。

本三位の中將
平重衡。

通盛
平教盛の子。

本三位の中將、一の谷に捕はれけるを、院宣屋島に下りて、三種の神器都に上せよ、重衡を放ち還さん。」とぞ傳へける。平家の請文こそまことに壯大ならびなかりしか。曰く、院宣謹みて承り畢んぬ。通盛卿以下、一の谷にて誅せられけるもの其の數少からず、何ぞ重衡一人の宥恕を喜ばんや。三種の神器は正統の天子一日も御身を離し給ふべきに非ず。そもく、我が君は故高倉の院の讓を受けさせ給ひてよりこゝに四年、東夷北狄の禍に遭ひて暫く西國に御幸あるのみ。天に二日無く、國に二君なし。還幸なからんに於ては神器などか都に還るべき。そもく、賴朝は逆賊の裔、幸に入道相國の慈悲によりて申し宥められし所なり。然るに忽ちにしてこの鴻恩を忘れて妄りに干戈を弄ぶ、やがて神罰其の身に返るべきか。君にも當家累代の奉公、亡父數度の忠節を思召し忘れずば、逆賊の裔に與し給はずして、早く西國の御幸あるべきか。一門の武運こゝに盡きなば、鬼

鬼界
大隅國。大島の東にある島。

宗盛
清盛の第二子。

横山健堂

評論家。名は達三。明治五年山口縣生。

一茶
俳人。通稱小林彌太郎。信濃の人。文政十一年歿。年六十五。

蕪村
俳人、畫人。

與謝氏、名は寅。攝津の人。天明三年歿、年六十八。

界高麗天竺震旦の果までもまかりなん。悲しい哉、人皇八十一代が間傳承あやまりなかりし靈器、今にして空しく異國の寶とならんとは。宗盛頓首謹みて申す。」と。

かくて平家は亡びぬ。亡ぶるまでも成敗の爲に其の名節を枉ぐることをなさざりき。あはれ、平家の世盛は誠に大いなりしが、其の没落の更に大いなるには及ばざりき。うるはしきかな、平家、かくして亡びたりとて何の恨むるところぞ。〔樗牛全集〕

一一 歳晩の名家

横山健堂

「梟よのほゝんどころか年の暮。」梟を見付けたのはいかにも一茶らしいが、さすがの一茶にも、年末の切迫さが想はれる。そこになると蕪村は鶯だ。「鶯の啼くや師走の羅生門。」は美しい。芭蕉は、どこまでも解脱だ。「人に家を買はせてわれは年忘。」「せつかれて年忘す

芭蕉
俳聖。通稱松尾宗房。伊賀の人。元禄七年歿、年五十一。
上田秋成
國學者、歌人。大阪の人。文化六年歿、年七十八。

蜀山人
江戸の狂歌師、太田南畝。文政六年歿、年七十五。

る機嫌かな。」或は「盗人に逢うた夜もあり年の暮。」「分別の底叩きけり年のくれ。」等の句を誦すれば、年頭も年末もない。剛愎な上田秋成は、白眼を以て一世を睨んでゐる。田舎に行つてゐた年の暮、

世の中にさはらで年もくれにけり
八重葎さへかれし垣根は

その寒生涯が想ひやられる。それと反對に、平々然として、極めて樂觀的の氣分を見せてゐるのは蜀山人だ。彼の年末の歌の中には、一つも陰氣な窮屈な心持はない、いつも春風だ。世を茶化してゐる。

いまさらに何か惜しまん神武より
二千年來くれて行く年



山蜀田太

中江藤樹
近江の儒者。慶安元年歿、年四十一。
熊澤蕃山
京都の儒者。字は了介。元禄四年歿、年七十三。

山陽
學者、詩人。賴氏。安藝の人。天保三年歿、年五十三。

致良知

中江藤樹筆蹟

年波のいまや越えんと門々に
たてし師走の末の松山

中江藤樹が、熊澤蕃山の岡山に出仕するのを送つたのは年の暮だ。

舊年無幾日、何意上旗亭、送汝青雲器、
愧吾犬馬齡、梅花鬢邊白、楊柳眼中青、
惆悵滄江上、西風教客醒。

此の雄偉な師弟の相別れる心持が、歳晚氣分の中に溶けてゐる。歳晚の作として千古の名篇、堂々たる近江聖人の面影が偲ばれる。

山陽の詩集に歳晚の作が多い。その特色は、彼が家庭に執着してゐる心持だ。故郷を出た翌年の暮には、「一出郷關歳再除、慈親消息定如何。」といひ、五年目の除夜には、故郷の兩親が、吾が子の事を話し合つて眠らないでゐるだらうと想ひやりを述べてゐる。

る。九州の遠遊を試みたときは、下關で年を送つた。赤間關守歲詞がある。誰でも三十九、四十の歳晩は殊に感觸が深い。山陽にも「平頭四十驚吾老」の一句がある。漢學者は四十以上を翁と云つたから、今人に比べると感慨は格別だつたらう。



山陽

晩年に近づいてからの山陽の除夜の作には、おひく世帯の好くなつて來てゐるのが分る。「妻償舊債了、兒著新衣成。貧家祭酒掃燈火亦覺明」といふのは、貧家と言ひつゝも始めて工面の好い年末を味はつたのだ。その次は益、好い。

細君拈据鬢蓬麻
獨有主翁無一事

婢辨辛盤僕掃家
出從村路覓梅花

東湖 水戸藩儒、藤田氏、名は彪。安政二年歿、年五十。

必有「我師」
嘉永甲寅夏五
書以祝「反射」
爐成功
藤田彪

大槻磐水 仙臺藩醫、名は玄澤。文政十年歿、年七十一。

伊能忠敬 曆學者。下總

東湖は政治家で、交際には力めた。そして清貧であつた。夏物と冬物とを質に入れ替する手紙が傳はつてゐるくらいだから、彼の歳晩は思ひやられる。然るに嘉永五年の暮、彼四十七歳俸祿が復舊される内報に接した時の手紙のうちに、例の東湖、更にそれを承知しなかつたところのを見て、その度胸の程は推し測られるではないか。

蘭學者の大槻磐水は、六十二歳の年の暮に歌がある。

槻弓のはるは六十路に三そへて

射るがごとくに過ぎし年の矢

洒落の歌だ。此の人が、始めて和蘭正月、即ち太陽曆の新年宴會を催したことは有名な話だ。

伊能忠敬の生涯は、努力の結晶だ。老いて益、精神旺盛だ。五十以



藤田東湖筆蹟

の人。文化十四年歿、年七十四。

間宮倫宗

地學者。又林藏と云ふ。常陸の人。弘化二年歿、年六十五。

物徂徠

柳澤侯備。通稱惣右衛門。字は茂卿。江戸の人。享保十三年歿、年六十三。

吉田松陰

幕末の志士。名は矩方、通稱寅次郎。萩藩士。安政六年歿、年三十。

黄門

水戸藩主徳川光圀。元禄十三年歿、年七十三。



大 觀 水

薩摩まで行つた。彼と共鳴した間宮倫宗は、此の頃蝦夷地探検を思ひ立ち、年末に二人は東西に分れて大旅行の首途に上つた。彼等が惜時の精神は、物徂徠が、年末も年頭も、蓬頭で一心に机に向つてゐたといふのと同じ類だ。

吉田松陰は二十二歳の十二月に、脱藩して江戸を出發し、東北遊の旅行を試みた。先づ水戸學を研究のため水戸に行き、その二十九日、瑞龍山に登つて黄門の墓に謁し、太田で年を送つたのを手始として、年々戦争のやうな歳晩を送つてゐる。二十五歳の春、下田で米艦に

投ずるの壯舉が破れて、その年の暮は萩に送り還され、野山獄で除夜を過した。年の暮に、獄中で幽囚録を書いた。その二十六歳の除夜は家に歸つてゐた。松下村塾を創める前年だ。此の夜、記_ス往時_ヲの一篇を作つて、下田投艦の時の回憶を書いた。二十九歳、即ち彼が最後の歳晩だ。再び野山獄に投ぜられて、生死未だ測るべからざるの時、除夜の句に、

燈火の影靜かなり年の暮

燎原の火のやうな情熱ある此の人にして、此の靜かなる句がある。哲人の面影が見られる。

新島襄が初めて米國から歸朝して、郷里の上州安中に歸省したのは、明治七年十一月の末である。それから歳晩の二十日餘を父母の膝下に送り、此の間に、初めて傳道を試み、更に同志社を大阪に開設するの目的を以て年末に上方へ往つた。同志社の創業は、かくの如く

新島襄
宗教育家、教育家。明治二十三年歿、年四十八。

年末に出發してゐる。

一二 近世の和歌

釋契沖

國學者。名は空心。大阪の人。元祿十四年歿、年六十二。

初瀬のや里のうなるに宿とへば

釋 契 沖

かすめる梅の立枝をぞ指す

賀 茂 眞 淵

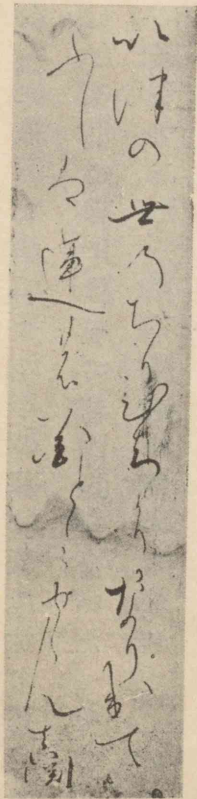
賀茂眞淵

國學者。歌人。遠江の人。明和九年歿、年七十三。

小筑波も遠つあしほも霞むなり

ねごし山ごし春や來ぬらん

いつの世のちりひちよりかなり用(で)てふじは蓮の花とみゆらん
眞淵



賀茂眞淵筆蹟

信濃なるすがの荒野をとぶ鷺の

つばさもたわに咲く嵐かな

田 安 宗 武

ふる雪にみ笠もめさず皇子たち

み狩せすなりみ鷹つとめよ

加 藤 千 蔭

加藤千蔭

歌人。號芳宜。關。江戸の人。文化五年歿、年七十四。

墨田川みの着てくださ筏士に

霞むあしたの雨をこそ知れ

小 澤 蘆 庵

小澤蘆庵

京都の人。享和元年歿、年七十九。

大井川月と花とのおぼろ夜に

ひとり霞まぬ浪の音かな

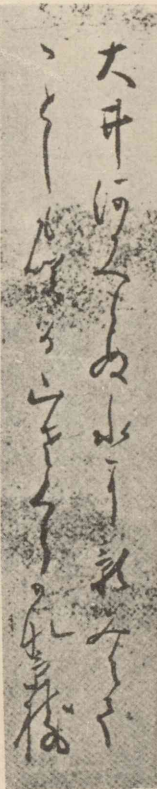
香 川 景 樹

香川景樹

歌人。鳥取の人。天保十四年歿、年七十六。

ほとゝぎすしばく啼きし明方の

大井川かへら
ぬ水に影見え
てことしも咲
(け)る山ざく
らかな 景樹



香川景樹筆蹟

山かきくもり小雨ふりきぬ

木下幸文
歌人。備中の

木下幸文

人。文政十四
年歿、年四十
三。

大丈夫のをのこさびすと打ちあげて
泣かぬこゝろぞまこと悲しき

熊谷直好

熊谷直好

歌人。周防岩
國の人。文久
二年歿、年八
十一。

しぐるゝは山路の常と思ふらん
降るにもうたふ柴人の聲

僧良寛

僧良寛

歌僧。越後の
人。天保二年
歿、年七十五。

霞たつながき春日を子供らと
手まりつきつゝ今日もくらしつ

橘曙寛

歌人。井手氏。
福井の人。明
治元年歿、年
五十七。

橘曙寛

雨晴れて清く
照りたる在明
のつきに鹿な
く高ほしの山
元義



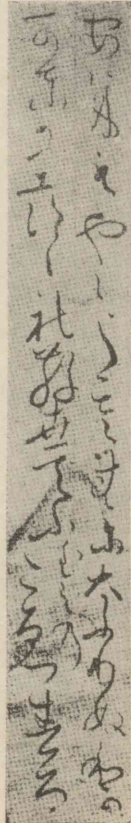
平賀元義筆蹟

平賀元義

歌人。備前の
人。慶應元年
歿、年六十六。

平賀元義

あきもや、よ
さむになりぬ
わがかどにつ
づれさせてふ
むしのこゑす
る



僧良寛筆蹟

風は清し月はさやけしいざ共に

をどり明さん老の名残に

わだつみの潮の八百路の八潮路ゆ

吹きくる風は涼しかりけり

蟻と蟻うなづきあひて何かこと

ありげにはしる西へ東へ

いつはりのたくみをいふな誠だに

さぐれば歌はやすからんもの

蹟筆覽 橋

大隈言道

歌人。福岡の人。明治元年歿、年七十一。

たまりて葉
まだ見せぬ花
びらの濡れ色
きよし蓮の朝
露 曙 覽

鶯のなく一こゑに忘れけり

いづこにか行くわが身なりけん

大隈言道

蹟筆道言隈大

そよといふ笹の葉音に引き入りて

なきがら顔になるかたつぶり

一三 鉢木

ワキ「行くへ定めぬ道なればく、來し方もいづくならまし

是は一所不住の沙門にて候。我此の程は信濃の國に候ひしが餘りに雪深くなりて候程に、先づ此の度は鎌倉に上り、春になり修行に出でばやと思ひ候。

信濃なる浅間の嶽に立つ煙く、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身に無き友の里、今ぞ憂き世を離坂、墨の衣のうすひ川、下す筏の板鼻や、佐野のわたりに着きにけりく。

ワキ「急ぎ候程に、是は早上野の國佐野のわたりに着きて候。餘りの大雪にて候程に、此の處に宿を借り泊らばやと思ひ候。如何に、此の家の内へ案内申し候。

シテ 佐野源左衛門常世。
ツレ 常世の妻。
ワキ 僧(北條時頼)。信濃なる浅間の嶽に立つ煙、遠近人の見やばとがめり。(在原業平)
大井山 信濃國北佐久郡大井庄にある山。
友の里 同郡伴野庄。
離坂 同郡查掛と輕井澤との間。
うすひ川 碓氷から出て上野國の烏川に入る。

板鼻

上野國高崎の
西約八軒。

佐野

高崎の東南約
二軒。

ツレ「誰にて渡り候ぞ。」

ワキ「是は修行者にて候。一夜の宿を御貸し候へ。」

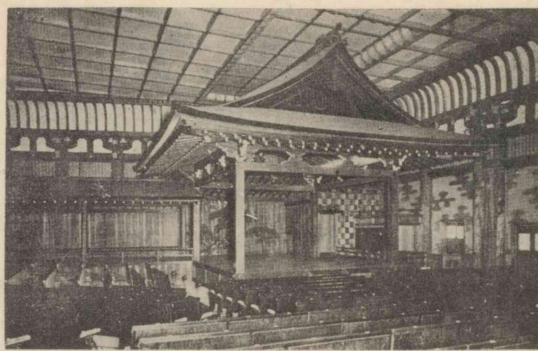
ツレ「易き御事にて候へども、主の御留守にて候程に、お宿は叶ひ候まじ。」

ワキ「さらば御歸りまで是に待ち申さうずるにて候。」

ツレ「それはともかくもにて候。」

如何に世にある人のおもしろう候らん。それ雪は鷲毛に似て飛んで散亂し、人は鶴髻を被て立つて徘徊すと云へり。されば今降る雪も、もと

見し雪に變らねども、我は鶴髻を被て立つて徘徊すべき、袂も朽ちて袖狭き、細布衣陸奥のけふの寒さを如何にせん。あら、面白から



寶生會館内

雪は鷲毛に似て
白樂天の句。
(和漢朗詠集)

陸奥のけふ
陸奥國狭布の
里。

ずの雪の日やな。

や、此の大雪に、何とて是には佇みて御入り候ぞ。

ツレ「さん候。修行者の御入り候が、一夜のお宿と仰せ候程に、御留守の由申して候へば、御歸りまでお待ちあらうずる由仰せ候程に、是まで参りて候。」

シテ「さて其の修行者は何處に渡り候ぞ。」

ワキ「我等が事にて候。未だ日は高く候へども、餘りの大雪に前後を忘れて候程に、一夜の宿を御貸し候へ。」

シテ「易き程の御事にて候へども、餘りに見苦しく候程に、お宿は叶ひ候まじ。此の山ばなをあなたへ十八町程御出で候へば、山本の里と申して泊の候。日の暮れぬ先に、只一足も御急ぎ候へ。」

ワキ「さては、しかとお貸しあるまじいにて候か。」

シテ「御痛はしくは候へども、我等二人さへ住兼ねたる體にて候程に、

山本の里
上野國群馬郡
八幡村大字根
小屋の舊名。

中々思ひも寄らず候。

ワキ「あら、曲もなや。由なき人を待ち申して候。

ツレ「浅間しや、我等斯様に衰ふるも、前世の戒行拙き故なり。せめては斯様の人に値遇申してこそ、後の世の便りともなるべけれ。然るべくはお宿を参らせ給ひ候へ。

シテ「あら、何ともなや。さやうに思召さば、など前には承り候はぬぞ。いや、此の大雪に未だ遠くは御出で候まじ。某追付き止め申さう。なう、旅人お宿参らせうなう。餘りの大雪に、申す事も聞えぬげに候。痛はしの御有様やな。もと見し雪に道を忘れ、今降る雪に行き方を失ひ、唯一所に佇みて、袖なる雪を打拂ひ打拂ひし給ふ氣色、古歌の心に似たるぞや。『駒とめて袖打拂ふ陰もなし、佐野のわたりの雪の夕暮』。斯様に詠みしは大和路や、三輪が崎なる佐野のわたり。

駒とめて
藤原定家の歌。
三輪が崎
大和國磯城郡。

一樹の陰
宿、一樹、下、
汲、一河、流、一
夜同宿、一日
夫妻、皆是先
世結縁、説法
明眼論

同「是は東路の、佐野のわたりの雪の暮に、迷ひ勞れ給はんより、見苦し
く候へど、一夜は泊り給へや。
同「げに是も旅の宿、く。假初ながら値遇の縁、一樹の陰の宿りも此
の世ならぬ契なり。それは雨の木陰、これは雪の軒ふりて、うきねな
がらの草枕、夢より霜や結ぶらん、
シテ「なう渡り候か。修行者にお宿は参らせて候へども、何にてもあ
れ参らせうざる物も無く候は如何に。
ツレ「折節是に粟の飯の候。苦しからずば参らせられ候へ。
シテ「さらば其の由を伺ひ候べし。
如何に申し候。お宿は参らせて候へども、何にてもあれ聞し召さ
れうざる物も無く候。折節是に粟の飯の候。苦しからずばそと
聞し召され候へ。
ワキ「それこそ日本一の事にて候。賜はり候へ。

廬生
唐の開元頃の
人。邯鄲で粟
飯の熟するを
待つて一睡す
る間に、榮華
を極めた五十
年間の夢を見
たといふ支那
の傳説。

シテ「總じて此の粟と申す物は、歌に詠み詩に作りたるをこそ承つて候に、今は此の粟を以て身命をつぎ候よ。げにや廬生が見し榮華の夢は五十年、其の邯鄲の假枕、一睡の夢の覺めしも、粟飯炊ぐ程ぞかし。あはれや、げに我も打ちも寝て、夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに、なうお覽ぜよ、斯程まで、
同「住みうかれたる古郷の、松風寒き夜もすがら、寝られねば夢も見ず、なに思ひ出のあるべき。」

シテ「あら笑止や。夜の更くるについて次第に寒くなりて候。焚火をしてあて申したくは候へども、恥づかしながらさやうの物も無く候。これなる鉢の木を伐り、火に焚いてあて申し候べし。」

ワキ「御志はさる事にて候へども、それは思ひも寄らず候。」

シテ「某もと世にありし時は、鉢の木にすぎ數多持ちて候へども、斯様に散々の體と罷成り、いや／＼木好きも無用と存じ、皆人に參らせ

埋木の
埋木の花咲く
こともなかり
しに身のなる
はてぞかなし
かりける。(頼
政、平家物語)

て候。さりながら、未だ三本持ちて候。あの雪持ちたる木にて候。是は梅櫻松にて、某が祕藏にて候へども、今夜の御もてなしに、此の木を伐り火に焚いてあて申さう。
ワキ「以前も申す如く、御志は有難う候へども、自然又お事世に出て給はん時の御慰にて候間、なか／＼思ひも寄らぬ事にて候。」

シテ「いや、とても此の身は埋木の花咲く世に逢はん事は、今此の身に
ては逢ひ難し。」

ツレ「只徒らなる鉢の木を、御僧の爲に焚くならば、

シテ「是ぞ誠に難行の、法の薪と思召せ。」

ツレ「しかも此の程雪ふりて、

シテ「仙人に仕へし雪山の薪。」

ツレ「かくこそあらめ。」

シテ「我も身を、

窓の梅

池凍東頭風度解。窓梅北面雪封寒。朗詠集

見じといふ
山里の折りがけ垣のうめの花いかなる人の見じといふらん。(菅家)

同「捨て人のための鉢の木、きるとてもよしや惜しからじと、雪打拂ひて見れば面白や如何にせん。先づ冬木より咲初むる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、こと木より先づ先立てば、梅をきりや初むべき。見じといふ人こそ憂けられ山里の、折りかけ垣の梅をだに、情なしと惜しみしに、今更薪になすべしと豫て思ひきや。櫻を見れば春毎に、花少し遅ければ、此の木やわぶると心を盡くし育てしに、今は我のみわびて住む、家櫻きりくべて、ひ櫻になすぞ悲しき。シテ」さて松はさしもげに、同「枝を矯め葉をすかして、かゝりあれと植置きし、其のかひ今はあら

雪打てては、梅もさかす。山の折りか、け垣のうめ、花いかなる人の見じといふらん。菅家

松はもとより此の以下の二句、正しくは「松はもとより煙にて、たきとなるもことわりや」とあるべきをかう改めて諷ふ慣はしになつてゐる。

みかきもり
御垣守衛士のたく火の夜はもえて晝は消えつゝものをこそおもへ。(大中臣能宣)

最明寺殿
北條時頼。

し吹く、松はもとより常磐にて、たきとなるは梅櫻、伐りくべて今ぞみかきもり、衛士の焚く火はおためなり。よく寄りてあたり給へや。ワキ「御志により、寒さを忘れて候。如何に申し候。主の御名字をば何と申し候ぞ、承りたく候。シテ「いや、某は名も無き者にて候。ワキ「何と仰せ候とも、唯人とは見え給はず候。何の苦しう候べき、御名字を仰せ候へ。シテ「此の上は何をか包み候べき。是こそ佐野の源左衛門常世が成れる果にて候。ワキ「それは何とて斯様に散々の體には御成り候ぞ。シテ「一族どもに押領せられ、斯様に散々の體となりて候。ワキ「さらばなど鎌倉へ御上り候ひて、御沙汰には出され候はぬぞ。シテ「運の盡くる所は、最明寺殿さへ修行に御出での上は候。斯様に

落ちぶれては候へども、今にてもあれ、鎌倉に御大事出て来るならば、ちぎれたりとも此の具足取つて投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳參じ着到につき、さて合戦始まらば、

同「敵大勢ありととも、く、一番に破つて入り、思ふ敵と寄合ひ打合ひて、死なん此の身の此の儘ならば、徒らに飢に疲れて死なん命、なんぼう無念のこと候ぞ。

たゞ頼め
たゞ頼めしめ
じが原のさし
も草われ世の
中にあらんか
きりば。(新古今集)

ワキ「よしや身の、斯くては果てじたゞ頼め、我世の中にあらん程、又こそ參り候はめ、暇申して出づるなり。

ツシテ「名残惜しの御事や。初は包む我が宿の、さも見苦しく候へど、暫しは止まり給へや。

ワキ「止まる名残のまゝならば、さて幾たびかゆきの日の、

ツレ「空さへ寒き此の暮に、

ワキ「いづくに宿をかりごろも、

シテ「けふばかり止まり給へや。

ワキ「名残は宿に止まれども、暇申して、

ツシテ「御出でか。

ワキ「さらばよ、常世。

ツシテ「又お入り。

同「自然鎌倉に御上りあらば御尋ねあれ。けうがる法師なり。かひがひしくはなけれども、披露の縁になり申さん。御沙汰捨てさせ給ふなど、言捨てて出船の、ともに名残や惜しむらん、く。

二

後シテ「如何にあれなる旅人、鎌倉へ勢の上るといふは誠か。なに、夥しう上るとや。おうさぞあるらん。東八箇國の大名、小名、思ひ思ひの鎌倉入、さぞ見事にてや候らん。白金物打つたる絲毛の具足

後シテ
常世。
ワキ
時頼。
ツレ
近臣。

狂言
從者。

に、金銀を延べたる太刀、刀、飼ひに飼うたる馬に乗り、乗替中間きら
びやかに、打連れく上る中に、常世が常に變りたる、馬物具や打物
の、物、其の物にあらざる氣色。さぞ笑ふらんさりながら、所存は誰
にも劣るまじと、心ばかりは勇めども、勇みかねたる瘦馬の、あら道
おそや。

同「急げどもく、弱きに弱き柳の絲の、

シテ「よれによれたる瘦馬なれば、

同「打てどもあふれども、先へは進まぬ足弱車の、乗り力なければ追ひ
かけたり。

ワキ「如何に、誰かある。

ツレ「御前に候。

ワキ「國々の軍勢共は皆々來りてあるか。

ツレ「さん候。悉く参りて候。

ワキ「其の諸軍勢の中に、如何にもちぎれたる具足を着、錆びたる長刀
を持ち、瘦せたる馬を自身控へたる武者一騎あるべし。急いで此
方へ來れと申し候へ。

ツレ「畏つて候。

如何に誰かある。

狂言「御前に候。

ツレ「君よりの御誕には、諸軍勢の中に、ちぎれたる具足を着、錆びたる
長刀を持ち、瘦せたる馬を自身控へたる武者あるべし。急いで尋
ねて御前へ参れとの御事にて候。

狂言「畏つて候。

如何に申し候。

シテ「何事にて候ぞ。

狂言「急いで御前へ御参り候へ。

シテ「何と、某に御前へ参れと候や。」

狂言「なか／＼の事。」

シテ「あら、思ひ寄らずや。定めて人たがへにて候べし。」

狂言「いや／＼其の方の事にて候。其の仔細は、諸軍勢の中にて、如何にも見苦しき武者を連れて参れとの御事にて候が、見申せば、そなた程見苦しき武者も候はぬ程に、さて申し候。急いで御参り候へ。シテ「何と。たとへば諸軍勢の中に、如何にも見苦しき武者に参れと候や。」

狂言「なか／＼の事。」

シテ「さては某が事にて候べし。畏まつたると御申し候へ。」

狂言「心得申し候。」

シテ「げに／＼是も心得たり。某敵人、謀叛人と申しかすめ、御前へ召出され、頭かぶを刎きねられん爲なるべし。よし／＼それも力なし。い

て／＼御前に参らんと、大床さして見渡せば、

同「今度の早打に、／＼、上り集まるつはもの、綺羅星の如く並み居た

り。さて御前には諸侍、其の外數人並み居つゝ、目を引き指をさし、笑ひ合へる其の中に、

シテ「横縫のちぎれたる、

同「古腹卷に鑄長刀、やう／＼に横たへ、悪びれたる氣色もなく、参りて御前に畏る。ワキわきやあ如何にあれなるは佐野の源左衛門常世か。これこそいつぞやの大

雪に宿借りし修行者よ、見忘れてあるか。いで汝佐野にて我に申せしよな。今にてもあれ鎌倉に御大事出で来るならば、ちぎれたりとも其の具足取つて投げかけ、錆びたりとも其の長刀を持ち、瘦



鉢 木

せたりともあの馬に乗り、一番に馳參すべき由申しつる、言葉の末をたがへずして、参りたるこそ神妙なれ。先づ今度の勢遣ひ、全く餘の儀にあらず、常世が言葉の末、眞か偽か知らん爲なり。又當參の人々も、訴訟あらば申すべし。理非に依つて其の沙汰致すべき所なり。先々沙汰の始には、常世が本領佐野の莊三十餘郷、返し與ふる所なり。又何よりも切なりしは、大雪降つて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を伐り、火に焚きあてし志、何時の世にかは忘るべき。いで其の時の鉢の木は、梅櫻松にてありしよな。其の返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松えだ、合せて三箇の莊、子々孫々に至るまで、相違あらざる自筆の狀、安堵に取添へたびければ、

シテ常世は之を賜はりて、

同常世は之を賜はりて、三度頂戴仕り、これ見給へや人々よ、初め笑ひしともがらも、是程の御氣色さぞ羨ましかるらん。

さて國々の諸軍勢、皆御暇賜はり、故郷へとてぞ歸りける。

シテ其の中に常世は、

同「その中に常世は、喜の眉を開きつゝ、今こそ勇め此の馬に、打乗りてかみつけや、佐野の船橋取離れし、本領に安堵して、歸るぞ嬉しかりける、く。」〔寶生流謠〕

一四 狐塚

主人「此の邊の者でござる。某、山田を數多持つてござる。當年は殊の外好う出來てござる。さりながら、此の頃は鹿、猿、貉が出て田を荒らします。太郎冠者を呼出し、山田の番に遣らうと存ずる。やい、太郎冠者あるか。

太郎「はあ、御前に居ります。

主人「汝を呼出すこと別の事でない。當年は身共の山田が殊の外好

う出來た。それに付き、日頃は鹿猿が田を荒らす程に、汝は今夜山田へ行て、鳥獸も來たらば逐うて番をせい。

太郎「畏まつてござる。私一人でござるか。」

主人「いや、後程は次郎冠者も見舞に遣らう程に、先づ行け。」

太郎「心得ました。」

主人「さりながら、此の内は狐塚の狐が出て化すと云ふ程に、化されぬやうにして、番をせい。」

太郎「夫はこはいこととござる。最早參ります。」

主人「明日早々歸れ。」

太郎「はあ。」

主人「えい。」

太郎「はあ。」

道行「扱もく、迷惑なことを言付けられた。夜晝使はるゝと云ふは

氣の毒なことぢや。參る程にこれぢや。先づ是に居て、番を致さう。」

主人「太郎冠者を山田へ番に遣はしてござる。定めて淋しうして居るでござらう。次郎冠者を見舞に遣はさうと存ずる。やいゝ、

次郎冠者あるか。」

次郎「これに居ります。」

主人「汝は大儀ながら、山田へ行て、太郎冠者が伽をしてやれ。」

次郎「畏まつてござる。」

主人「小筒もちと持つて行け。」

次郎「心得ました。是はさて迷惑なれども、參らざるまい。主命ぢや。是非に及ばぬ。是は暗うて、何處やら知れることでない。

呼ばはつて見よう。ほいゝ、太郎冠者。やい何處に居るぞ。」

太郎「さればこそ狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。好う似せた。」

汝おのれ化さるゝことではないぞ。先づ眉毛を濡さう。

次郎「ほい〜」。

太郎「ほい〜」。此處に居るわ。

次郎「何處に居るぞ」。

太郎「此處に居るわ。やあ、次郎冠者か」。

次郎「なか〜」。頼うだ人が言ひつけ

られて、伽に來たわ。

太郎「好うこそおりやつたれ。さても

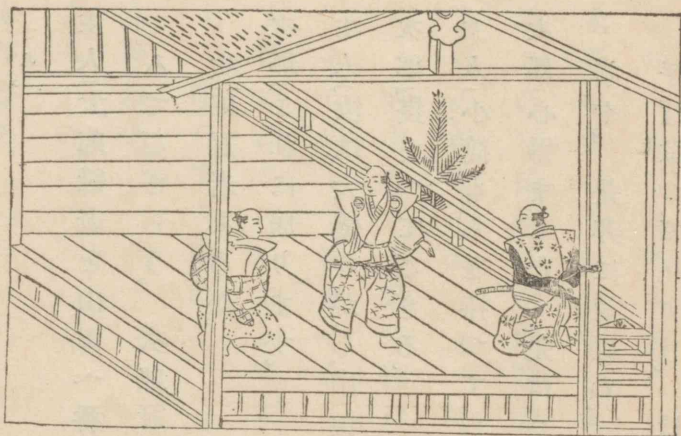
さても、好う化けた。其の儘の次郎

冠者〜」。捕へて縛つてやらう。

やい、次郎冠者。最前向うの山から

大きな鹿が出たを、身共が逐うたれ

ば、此方こなたの山へくわら〜と逃げたわ。



塚 狐

次郎「それは出かした」。

太郎「どつこへやることではないぞ」。

次郎「是は何とするぞ」。

太郎「何とするとは、狐め、化さるゝことではないぞ」。

次郎「おれは次郎冠者〜」。

太郎「何の次郎冠者。汝、縛つて此の柱に括つて置いて。狐殿、よい姿なり

の。汝、今に皮を剥いでくれようぞ」。

主人「太郎冠者、次郎冠者を山田へ遣はしてござる。心許なうござる。

見に參らうと存ずる。ほい〜、太郎冠者やい。次郎冠者やい。

ほい〜」。

太郎「是は如何な事。又狐が出居つた。あれは頼うだ人の聲ぢや。

是も捕へてやらう。ほい〜」。

主人「ほい〜。何處に居るぞ」。

太郎「此處に居ます。」

主人「やあ、これに居るか。淋しからうと思つて、見舞に來た。次郎冠者を先へおこしたが。」

太郎「なか／＼。彼處あつちに居ます。是は如何な事。是も好う化けた。其のまゝ頼うだ人ぢや。縛つてくれう。がつきめ。おのれ、騙さるゝことではないぞ。」

主人「是は何とするぞ。身共ぢや。」

太郎「おのれも好う化けた。先づ縛つて此の大木に括り付けて置いて。致しやうがある。狐は松葉で燻べると嫌がると云ふ。燻べてやらう。さあ／＼、尾を出せ。鳴け／＼。」

主人「汝、太郎冠者め。主しゅを此の様にして。罰當りめ。」

太郎「何を狐殿言はるゝ。さらば、次郎冠者狐も燻べてやらう。さあ、さあ、鳴け／＼。こん／＼と言へ。」

次郎「是は何とする／＼。」

太郎「ありや／＼。厭がるわ／＼。汝二匹ながら、鎌を取つて來て、皮を剥いてくれうぞ。待つて居れ。よう化さうと思つたなあ。只今殺してくれうぞ。鎌を取つて來るぞ。」

主人「さて／＼、氣の毒な奴ぢや。やあ、それに見ゆるは次郎冠者か。次郎「左様でござる。こなたは頼うだ御方か。」

主人「なか／＼。汝なんぢも縛り居つたか。」

次郎「いかにも、縛られました。」

主人「何と、鎌を取つて來る、殺さうと言ひ居つたが、何と其方そちが繩は解かれぬか。」

次郎「されば、どうやら繩が解けさうにござる。解けますぞ、解けますぞ。さあ、解きました。どれ／＼、此方も解きませう。さてもさても、憎い奴でござる。何としたものでござらう。」

主人「いや、この態では側へ寄るまい程に、元の様にして居て、これへ來たらば、捕へて彼奴をゆりに上げう。

次郎「一段と好うござらう。

主人「さあ、これへ寄つて、元の様にして居よ。

次郎「心得ました。

太郎「狐めは二匹ながら居るか知らぬ。此の鎌で打殺してくれう。

さあ、今打殺すぞ。

主人「そりや、次郎冠者。

次郎「心得ました。

主人「汝は憎い奴の。次郎冠者、足を持って。

次郎「心得ました。

主人「さあ、ゆりに上げ、く。

太郎「これは、何と狐共するぞ。

主人「狐とは、まだ汝めは、憎い奴の。縛り居つたがよいか。これが

好いか。

太郎「さては、頼うだ人。次郎冠者か。許させられ。眞平御許され、御

許され。

二人「何處へうせる。やるまいぞ。」 [續狂言記]

一五 笑

戸川秋骨

戸川秋骨 文學者、慶應大學教授。名は明三。明治三年熊本縣生。シルレル ドイツの詩人、戯曲家。一七五九—一八〇五年。ウイルヘルム・シルレルの戯曲、一八〇四年に成る。テルが我が兒の頭上の林檎を射落した物語は此の曲の一場景である。

自然は無心で、その感情といつては、見る人の心から、その心を自然に擬したに過ぎないのであるが、波浪が怒るとか、山岳が昂然としてゐるとかいつた類の形容は、随分よく見受ける。しかし笑の形容は甚だ少いやうに思ふ。もつとも自然の笑も決して皆無ではない。シルレルのウイルヘルム・テルの劈頭に、湖水が微笑するといふ意味の句が見える。湖水が微笑するといふのは有りさうなことである。

また花笑ひ鳥歌ふともいふから、自然の笑といふことは可なりあるやうにも思はれる。唯その笑が微笑に止まつて、笑の一部分に過ぎないのは、是非もないことである。

處が人間にはいろ／＼な笑がある。哄笑・放笑・失笑・冷笑・苦笑・微笑、近頃ではそれでも足りないと思えて、微苦笑などといふ笑ひ方まで出来て来た。これは人事の進むにつれて、笑の變化し、且複雑になつた證據であらう。そして人間の感情の變化は、一番よく笑に現れるのであらうとも思はれる。これを日本の假名で行くと、ニコ／＼、ニヤ／＼、ゲタ／＼、ゲラ／＼、それからカンラカラ／＼などといふ笑ひやうもある。これは甚だ難かしい笑ひ方であるが、元來天狗の笑ひ方であるから、誰もあまり見聞きした事はない。同じニヤ／＼笑ひにもその間に微妙な相違があつて、到底文字のみでは盡くされぬ。堪へ切れない嬉しさを裏切るニヤ／＼もあれば、他をさげすんで笑

虎溪の三笑

支那晋の惠遠法師、廬山に隠居して虎溪を渡るまいと誓つたが、曾て陶淵明・陸修静の二人の歸るのを送つて覺えず虎溪を渡り、虎の嘯くのを聞いて、初めてこれに心づき、三人共に大笑したといふ傳説。

拈華微笑

釋迦靈鷲山で無言にして唯華を拈じた時、唯一人迦葉のみが其の意を悟了して破顔したといふこと。

ふニヤ／＼もある。さらに虎溪の三笑などと來ると、どうも嬉しいのだから、悟つたのだから、人を馬鹿にしてゐるのだから、甚だ見當のつかない笑である。

お前はなぜ青山などに隠れてしまふんだと訊かれて、笑つて答へ



虎溪三笑(橋本雅邦筆)

ず、心自ら閑なりなどと澄ましたのは李白であつたが、とかく支那人の笑は難かしくなる。もつとも難かしい笑には拈華微笑と

いふのがある。かうなると笑もなか／＼樂ではない。悲劇よりも喜劇に深い人生觀・宇宙觀があるといふやうな説を耳にしてゐるが、成程さういふ處もあるなと折々感じる次第である。

西洋の文學には意味の深いをかしみを書いたものが多いやうだ

膝栗毛
十返舎一九の
東海道膝栗毛
等。



スンケッパ

ヂッケンス
イギリスの小
説家。一八一
二—一八七〇
年。
ピクウィック
The Presh-
mous Papers
of the Pick-
wick Club, サ
ッケンスの傑
作小説。

く書いてある。殊にその一節は笑なくしては読む事が出来ない。事實風に帽子を取られた時の態度は、をかしなものである。あれ位眞剣と滑稽とを併せ現した圖はあるまい。否眞剣だから滑稽をなすのではあるが。買ひたての帽子を汚されたことや、他から見られ

士道の笑を噛みつぶした習慣からと、今日の切迫した生活からとて、笑が殆ど無くなつてゐるのは、なさけない。ヂッケンスのピクウィックには、その劈頭に、風に帽子を吹飛ばされた時の心持が面白

た體面や自分の努力といつたやうな、いろ／＼なことが混じ合つて、當人の心には、甚だ複雑な感じが互に衝突してゐるのである。その結果は自分を嘲るやうな、妙な苦笑のやうな笑となつて現れる。急



劇のナナン第二世
(一八八九年俳優ナナン扮したる)

いで駈けつけた電車に乗損ねた時も、大抵の人は笑つてゐる。實は笑つてゐられる場合でなく、口をしいといふ感じのあるべきところだが、人から見られて體裁が悪いといふためからか、矢張一種苦笑のやうな笑をする。事は簡單でも中々複雑な心理から出た笑である。

私は作り物語の中に、忘れられない複雑な笑の例を二つ思ひ出す。一つはシェイクスピヤのリチャード第二世が、敵なるボリングブルッ

ンナン
Sir Frank R.
Beison. 英國
近代の名優。
沙翁の作品全
部を演出した
ので名高い。
一八五八年生。
シェイクスピ
ヤ
イギリスの大
劇詩人。一五
六四—一六一
六年。
リチャード第

二世
 英國ブランタ
 セネット家の
 王。無道亂行
 の爲に従弟ラ
 ンカスター家
 のボリンゲー
 ルック (Bol-
 insbroke) の
 爲一三九九年
 に廢せられ、
 遂に弑せられ
 る。沙翁作
 「リチャード
 二世」は彼の
 傑作史劇の一
 で、そのあと
 を承ける「ヘ
 ンリー四世」
 二部及び「ヘ
 ンリー五世」
 と併せて四部
 作英史劇とせ
 られる。
 景清
 平氏の武士悪
 七兵衛景清の
 末路を脚色し
 た謠曲。觀世
 元清作。

ク、すなはち後にランカスター家の第一の王、ヘンリー第四世となる
 人に追詰められ、捕はれて倫敦塔へ囚はれ、その身となつた時、その牢獄
 の廻廊のやうな處で、一囚徒の足枷を嵌められてゐると、顔を見合
 はせて、ハ、ハッハと笑ふ一節である。昨日の帝王も今日は囚人とな
 る運命の數奇を想はせる笑で、落つれば同じ谷川の水、君主も囚徒も
 無いといふ意味の笑と察しられるが、とにかく印象の深い笑であつ
 た。或は私が其の時の演者の技倆に感じた結果、その笑にも感じた
 のかとも思ふが、いづれにしても私には忘れられない笑の一つにな
 つてゐる。

もう一つは謠曲の景清の笑である。その景清は必ずしも笑つて
 ゐるのではないが、心持は些か笑つてゐる。盲目乞巧人となつた景
 清は、日向の國に忍んでゐた。そこへその忘れがたみなる娘が尋ね
 て來る。景清は心強くも武士の心で、景清などといふ男は知らぬと

いつて、娘を逐ひかへす。が、里人の口から事實が漏れて、せん方なく
 親子の對面をなし、その昔平家一方の旗頭として屋島に戦ひ、敵將三
 保の谷と渡り合つた鍛引しんびきの一段を物語つて聞かせる。時世非にし
 て、今は盲目乞巧人となつた老景清も、
 昔を想ひ浮かべて、なほ残る一片不屈
 の覇氣を見せるところ、まことに笑ど
 ころでなく、むしろ涙を催させるほど
 に緊張したものであるが、その中、摺ん
 だ鍛の切れたとき、三保の谷が、汝の腕
 の強さよといへば、景清は汝が頸の骨
 こそ強けれど、笑つて左右へ退きたり
 と物語る、その笑こそ極めて複雑な笑で、實はそれはその時の笑でな
 く、昔日の笑なのであるが、その氣分が此の物語をしてゐる老衰の景



(筆櫻桃口谷) 清景の能

清にまだ残つてゐて、それでその笑の心持が頗る複雑なものとなつてゐるのである。私には景清の一曲、殊に此の昔の笑の氣分が、堪らなくよく思はれて、いつまでも忘れられないのである。

一六 街頭の春

新年の街頭に佇んで、吾等は特に社會に生きることの喜、或は吾等の社會の根柢の強固なことを感得する。街頭に見かけるのは、多くは、年中行事式のものである。新年は殊に保守的である。大部分、在來の規定に基いて様式化された社會生活が營まれる。

無論、社會は流動する。年々歳々春必ずしも同じでない。特に近來における社會生活の變轉は著しい。意識的に、或は無意識的に世の中は急速度に變つて行く。變化の作用が新年の街頭に及ばぬはずがない。いかに年中行事式の様式化した社會生活を繰返すところ

ろといへども、様式化は決して枯骨化ではない。こゝにも亦時代の著しい影響がなかに支配してゐるのである。吾等は最早舊記に書かれたやうな街頭情景を偲ぶことが出來ない。十年二十年前と比べても、如何に變つて來たことか。

けれども、かく變化する間に、いつかな變らぬ社會生活の様式、殆ど恒久性を持つかと思はれるほどに年々歳々繰返されて、人の心の奥に残存するところのものが、多く新年の街頭に、即ち社會生活の前面に現れて來る。吾等はこの事の意義を深く考へるのである。こゝに社會生活の根柢の強固さを覺える。

新年を目出たしとして壽ぐ。年頭の祝辭を交さぬものは先づない。年始回禮の人々が街路に往來する。この儀禮は極めて一般的で、古くから行はれ、今に衰へず行はれてゐる。門松を立て竹を配すること簡と複との違こそあれ、決して泯びぬ民俗であつて、捨て難い

新年街頭の美觀である。日の丸の旗は申すまでもなく初春の風に翻される。或は注連繩を張り、羊齒ゆづり葉橙を加へて門戸が飾られる。習俗儀禮の發生の意義は或は忘れられてしまつてゐよう。けれども、年頭に際會して舊一年を清算し、新しき出發を希望せんとする人心は、期せずしてこの様式化された新年儀式を遵守するのである。この保守的にして而



街頭の春 (明治三十三年)

も大きな新希望を包藏することの看取される新年の慣行に、吾等は吾等の社會の強味を發見せざるを得ない。惠方或は吉方の俗信が多く行はれ、極めて多數の社會大衆が神社佛閣に參詣する。人生における運命の支配は極めて多角的である、そして福運を希望せぬ者は一人もない。如何なるものをもつて福運と解するかは、各人の人格に依る。けれども人生



頃の東京日本橋—山本松谷筆

の幸福は何人もこれを求める。而して運命は不測である。不測の運命中に幸福を求める大衆の心が宗教的となる。その新年に際して發露するは、舊年を送り新出發に臨む門出において、當然の心的傾向である。吾等は社會大衆が新年街頭に示した宗教心を以て、利己一遍の欲求と解しない、却つて社會人心が自暴自棄に陥らず、新生の願望を表示するものとしてこれを望ましく思ふ。

雑煮を祝ふ慣習は、更に一般的で且恒久的である。およそ家をなすところ、いかなる家でも先づ新春に雑煮の餅を膳に備へる。いかなる貴顯紳士の家庭でも、いかなる貧乏な暮しの家でも、おしなべて行はれる雑煮の祝儀は、その一般性のゆゑに非階級的である。もつとも極貧にして、これほどに一般的なる新年の祝儀をも享受出来ぬものも稀にある。けれども、それほどの不公平は社會が看過しない。祝儀の普及のために社會事業が活動する。かくして日本人的なる

社會生活の及ぶ限り、千里同風元旦から始まる雑煮を祝ふ。この一般的なる新年慣行に社會一體感が湧出て來る。

街頭の春は年改つてなほ恒存的なる社會生活の姿を表示してゐる。こゝに吾等は社會生活の安固を確認するのである。〔大阪毎日新聞〕

一七 從弟に與ふ

吉田 絃二郎

駿二よ。元日は伊豆は強風であつた。木も岩も吹飛ばされさうな荒天であつた。それでも松山の中の小屋の味が忘れ難く、午後になつて強風の中を登つて行つた。

小屋から二三丁登れば、富士も見え、箱根も見え、遠く南日本アルプスの雪も見える。

今年は天城の雪が深いせゐか、天城の猪が小屋から五六丁離れた畑までやつて來て、作物を荒すので困るといふことである。

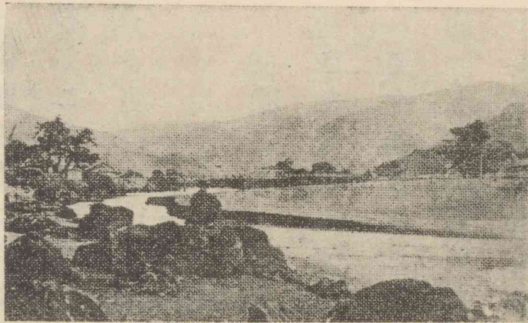
吉田絃二郎
文學者。早稲田大學講師。
實名源次郎。
明治十九年佐賀縣生。
南アルプス
所謂日本アルプスを北・中央・南の三部に分つたものの一。即ち從來の赤石山脈を指す。
天城
伊豆の中央より東に偏つた死火山。一四〇〇メートル。

私は一日も缺かすことなしに山に登つては、小屋の爐の傍に坐つて、冬の山を眺め、小鳥の聲を聴いてゐる。

あのあわたゞしい東京の生活からわづか三四十里離れたばかりで、このやうな靜かな生活があるといふことは、自分ながら時々不思議に思ふくらゐである。

この山にゐて木を梢を焚きながら考へてゐると、どうも東京の生活、近代の生活といふものに對する疑が再び頭を擡げて來る。

北海道に行つて山を切り拓いてゐる友達からは、すぐ近くの澤に鶴が鳴いてゐる



天城山遠望

ことなどを知らせて來たが、恐らく彼は今、この秋建直したばかりの小屋の中に、アイヌの若者を對手にストーヴの火を見つめ

ながら讀書に耽つてゐることであらう。

駿二よ。私は何時も考へることであるが、近代の都市生活が根強くなつてゆけばゆくほど、都市と村落との生活矛盾は激しくなつて行く。村落の人たちは、早晚自分たちの生活保存のためには、どうしても都市といふものと何等かの形に於て鬭はなければならぬことになつて來るであらう。

私にはどうしても今日の都市生活が正しい生活であるとは考へられない。若い女たちは、正直な素直な魂といふものの尊さをば輕蔑してゐる。人間が人間であるべきことをば、むしろ時代遅れであるかのやうに考へてゐる。若い男たちは、理想を輕蔑する。明日の詩を描くことを忘れてゐる。獨り苦しむことを考へない。人生意氣に感ずといふ男らしさを失つてゐる。正直な勤勞を蔑視してゐる。

駿二よ。お前がこの頃文學に志してゐることも、文學方面の本ばかり読んでゐることも姉さんから聞いた。姉さんは大分心配しておいでのやうだ。

私の口からしては、お前に文學をやれともやるなともいふことはできない。凡ては運なのだ。併し唯これだけのことは言へる。もしお前が確に日本に二人とないほどの文學的天才であるといふ自信を持つことができるなら、文學をやつたがいゝ。もしさうでなくて、普通の秀才ぐらゐの程度なら、文學者になることはお勧めしかねる。一通りの秀才であつたら、或は一通りの文學者になることはできるかも知れない。併し、結局一通りの文學者たるに過ぎないのだ。それでは男子畢生（せいせい）の事業として、ただ物足りない話である。

明治から大正、昭和にかけて、幾百千といふ文學者があつたて

あらう。しかも彼等が嘗て文學者であつたことが、果してどれほど日本を益し、彼自身の生活を意義あらしめたか。

駿二よ。もしお前が、今日の一通りの都會人的な生活、都會人的な刺激、都會人的な虚名といふやうなものを目あてとして文學に志するのであるならば、私は何處までもお前の志を輕蔑する。駿二よ。私は北海道の山を切り拓いて小屋を建て、燕麥を播き、木を伐つてゐる友人を、どれほど尊敬するか知れない。

彼は雪の間をたゞ讀書と瞑想と人生についての思惟とに暮してゐるであらう。そして雪が解けると同時に、彼は處女林の中を歩みて、熊のごとく働く。私は彼の生活を尊敬する。

駿二よ。もしお前が文學者たることを志すとしても、お前は働くことを忘れてはならぬ。お前はいつも熊のごとく働くことをしなければならぬ。お前の手の皮は木皮のごとく堅くな

イワン(Ivan)の王國
トルストイの
童話。

トルストイ
ロシアの思想
家。小説家。
一八二八—
九一〇年。



野曠にまさふトルストイ

ければならぬ。

駿二よ。お前はイワンの王國の話を忘れてはならぬ。そこでは手の皮の厚い者のみが食卓に着く権利を與へられてゐる。駿二よ。私はお前が文學者たる前に、先づ眞に人間として生きる道を學ばんことをお勧めする。人間としていかに生きる事が最も正しきかを知らんことをお勧めする。

駿二よ。トルストイは文學者ではなかつた。彼は陸軍士官であつた。人類について思惟する大學生であつた。人生について懊惱する貴族の子であつた。お前は、人生に對するトルストイの氣魄を學ばなければならぬ。

白樂天
唐代の詩人。
名は居易。

良寛
歌僧。俗名山
本榮藏。越後
の人。天保二
年歿、年七十
四。
一茶
俳人。小林彌
太郎。信濃の
人。文政十年
歿、年六十五
實朝
征夷大將軍、
右大臣。歌人。
源氏。賴朝の
第二子。承久
元年歿、年二
十八。

駿二よ。お前は白樂天の詩を讀まなければならぬ。詩の形ではない。白樂天の詩人らしき魂に打たれなければならぬ。彼の仙骨に觸れなければならぬ。

駿二よ。お前は、最も愚かなる、最も無技巧なる文學者の魂の偉大さを發見しなければならぬ。良寛の歌、一茶の句、更に遡つて實朝の歌、萬葉の歌人たちのそれを。

駿二よ。お前は一篇の小説、一篇の詩を作らないでもいい。お前は無韻の詩、無形の文學の更に深く人生の底、人情の底に動きつゝ、生きつゝ、流れつゝあることを知らなければならぬ。

駿二よ。お前は小さな文學者を志してはならぬ。若し文學者たらんことを志すならば、先づトルストイたれ、イブセンたれである。

駿二よ。お前は先づ何よりも詩人でなければならぬ。お前は先づ何よりも哲人でなければならぬ。お前は先づ働くことを愛する人間でなければならぬ。



ンセブイ

獨歩
自然派の小説家。國木田哲夫。千葉縣の人。明治四十一年歿、年三十八。

啄木
生命派の歌人。石川一。岩手縣の人。明治四十五年歿、年二十七。

駿二よ。お前は先づ、燃ゆるごとき宗教の人でなければならぬ。青年の炎を胸に感じなければならぬ。獨歩や、啄木の生命は、その炎のごとき感激である。炎のごとき血であり、炎

のごとき涙である。
駿二よ。もしお前の胸に詩が湧いて來たら、天に向つて歌ふがよい。敢て屑々たる都會人に聽かせる必要はない。
駿二よ。もしお前が詩人たらんことを欲するならば、天に向

つて歌ふことを恥ぢない程の歌を歌はなければならぬ。

天には星が瞬いてゐる。かの星こそ嘗て萬葉の歌人たちの歌を聽き實朝の歌を聽いたのだ。

駿二よ。私はけふも伊豆の芝山を歩みつゝ、富士を眺め、函嶺十國の草山を眺めてゐる。

玉くしげ箱根のみ海けけれあれや、
二くにかけて何かたゆたふ

わたくしは實朝の歌を思ひ出す。二子の山がたゆたふかぎり、實朝の歌は日本人の魂に喰入るであらう。

駿二よ。嘗て實朝が函嶺の天空に向つて潜かに歌つた歌の偉大さを忘れてはならぬ。

元日から草山を歩いたが、さすがにもう春だ。こちらでは梅がちら／＼綻びはじめた。鶯はさかんに笛鳴をしてゐる。

十國
伊豆熱海町の西北に聳えてゐる日金山のこと。山頂から附近十箇國の眺を縱にし得るところから十國峠と稱せられる。

いつも聽く啄木鳥は、未だ一度も聽かぬ、赤松の間を歩いては
耳を傾けてゐるが。
では駿二よ。姉さんによろしく。

一八 實朝の歌

實朝
既出。その家
集を金槐和歌
集といふ。

春雨はいたくな降りそ旅人の

道ゆき衣濡れもこそすれ

春過ぎていくかもあらねどわが宿の

池の藤浪うつろひにけり

吹く風の涼しくもあるかおのづから

山の蟬鳴きて秋は來にけり

ものゝふの矢なみつくろふこての上に

霰たばしる那須のしの原



源 實 朝

玉ぼこの道は遠くもあらなくに

旅とし思へばわびしかりけり

大海の磯もとゞろに寄する波

われて碎けてさけて散るかも

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や

沖の小島に浪のよる見ゆ

大君の勅ちよくをかしこみ父母に

心はわくとも人にいはめやも

山は裂け海はあせなむ世なりとも

君に二心わがあらめやも

ひむがしの國にわがをれば朝日さす

はこやの山のかげとなりనికి

一九 常磐樹

島崎藤村

島崎藤村
詩人、小説家。
名は春樹。明治五年長野縣生。

あゝ雄々しきかな傷ましきかな
かの常磐樹の落ちず枯れざる
常磐樹の枯れざるは

百千もぢの草の落つるより

傷ましきかな

其の枝に懸る朝の日

其の幹を運る夕月

など行く旅の迅速すいぶんなるや

など電いなづまの影と馳いそするや

蝶の舞

花の美

など遊ぶ日の世に短きや

など其の酔の早く醒さむるや

蟲草の葉に悲しめば

一時ひとときにして既に霜

鳥潮しほの音に驚おどけば

一時にして既に雪
木枯高く秋落ちて
自然の色はあせゆけど
大力天を貫きて
坤軸遂に靜息なし
ものみな速くうらがれて
永き寒さも知らぬ間に
汝千歳びなしちの時に嘯き
獨し立つは何の力ぞ
白銀しろがねの花霏々として
吹雪の煙闇き時
四方は氷に閉されて
江海えうみも音をひそむ時

汝緑の陰も朽ちせず
空を凌ぐは何の力ぞ
立てよ友なき野邊の帝王すいらぎ
ゆゝしく高く立てよ常磐樹
汝の長き春なくば
山の命も老いなんか
汝の深き息なくば
谷の響も絶えなんか
あしたには葉をうつ雲みぞれ
千草も知らぬ冬の日の
嵐に叫ぶうきなやみ
いづれの日にが
氷は解けて

其の葉の涙

消えんとすらん
 あゝよしさらば枝も摧けて
 緑の色の落ちなん日まで
 雲浮かば
 無縫の天衣
 風立たば
 不朽の緒琴
 おごそかに
 立てよ常磐樹
 あら雄々しきかな傷ましきかな
 かの常磐樹の落ちず枯れざる
 常磐樹の枯れざるは

百千の草の落つるより

傷ましきかな 「落梅集」

二〇 長柄堤訣別

坪内雄藏

長柄堤訣別
 脚本「桐一葉」
 の大詰の場。
 時は慶長十九
 年九月の末。
 桐一葉には讀
 み本體と實演
 用の二種が
 ある。本篇は
 その實演用に
 據る。

長柄堤
 大阪城の北、
 淀川の堤。
 坪内雄藏
 劇作家、文學
 者。文學博士。
 號は逍遙。安
 政六年岐阜縣
 生。
 大野
 修理亮治長。
 片桐
 市、正且元。豊

白「神崎氏でござるか。」

神「白倉氏か。片桐主従は程なくこれへ参りますぞ。御油斷めさるな。」

白「心得申した。昨日彼が屋敷を圍み、お討取あるべきお手筈なりしが、修理亮様の御智略にて、わざと彼等の英氣を抜き、落行く途中で

臣家の重臣。
「桐一葉」は此
の人を主人公
としたもの。

討取る魂膽。（こゝろ）
神「ねらひの的は且元一人。三十餘挺いつ時に、彼を目あてに切つて
放たば、討洩らすことはよもあるまい。
白「者共必ずぬかるまいぞ。
皆々「心得ました。

ト此の時鐵砲の音して、神崎に中り、よろしく落入る。これにて一同驚
きあわてる。途端に下手より片桐が家來本村等を先に、家來大勢、何れ
も陣立にて、抜きつれて出で、

本「斯くあらんと豫ての手配り、主君を守護する我々が……
皆々「遺恨の太刀先受けて見よ。

ト切つてかゝる。大野方はあわて騒ぎ、すぐ逃げて入る。片桐方追う
て入る。

トこれより床（ゆか）の淨瑠璃になる。

淨「晨雞再び鳴いて残月薄く、征馬しきりに嘶いて行人出づ。はや別
れ行く横雲や、残んの星を一つづ、鐘が消しゆくいな（いなき）のめの、長柄堤
に秋たけて、一叢蘆に風黒く、有明凄き淀川みづ。

トよき頃に道具幕を切つて落すと長柄堤の體。こゝに平舞臺上手よ
き處に市、正床几に腰を掛け、その後に乗馬に馬丁二人附添ひ控へ居り、
下手よき處に主膳、正つくばひ、その下手後に家來大勢控へて居る。

市「討手來らざれば自裁も叶はず、人々の諫に従ひ、茨木へ落去とは決
せしもの、お家の後事を長門守に託し置きたく、先刻竊かに三右
衛門を木村が邸へ走らせたり。我はこれにて返事を待たん。御
身は我に代り手勢を差配し、一足先へ參らるべし。

主「仰ではござりますれど、油斷ならざる折柄、只御一人此の處に御座
あらんは心もとなし。

市「いや、それはいらぬ遠慮。我等が警護は、豫て清藏等に申し含め置

清藏
本村氏、且元
の家臣。

主膳、正
片桐且元の弟
貞隆。
茨木
攝津國三島郡。
片桐氏の封地。
長門守
木村重成。
三右衛門
今村三右衛門。
且元の家臣。

いたれば氣遣なし……

ト向うを見て、

お、あの人影は。

浄詞のうちに遙かに足音。

ト此の時今村三右衛門揚幕より急ぎ足にて出で來り、すぐに本舞臺へ來て、

今、はつ、申し上げます。長門様にはおつつけこれへ。

市、大儀々々。然らば弟、御身は先へ參られよ。そちも共に。

ト今村へこなし、これにて主膳、正は一同へこなしあつて、市、正に會釋し、皆々を引連れ、二重に上りて上手へ入る。

浄、顔見合せて是非なくも、主膳を先に一同は、心残して行過ぐる。

浄、後には何か一思案、寂然として駒立つる、長柄堤のありあけがた、見る目も暗しをち方におぼろくと現る、名に大阪の四衢八街。

悄然として一棟高く聳えしは、

ト此の文句の間に市、正は馬に跨りて二重に上り、向うを見ることあり。

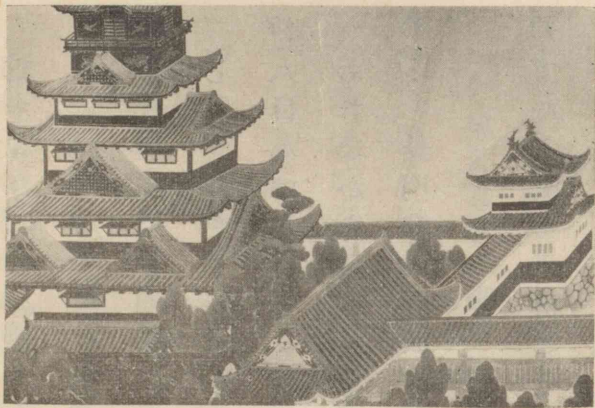
市、お、あれこそは御天守ぢやなあ。

ト向うを見て宜しく思入。

南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと築かせられし大阪城、故殿下かくれさせ給ひて後、まだ程も無きに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ、今にもあれ事起らば、金城湯池もそのかひなく、

浄、言ひかけて聲曇らせ、こらへず馬より飛びくだり、

故殿下
豊太閤。



城 阪 大 の 時 當

ト文句の通り。

これしかしながら不肖且元、愚昧にして先見なく、姑息因循して大事を誤り、關東の罫に罹つて、御遺命に戻り奉る今日の仕合。不忠ともいひがひなしとも思し召されん。それを思へばこの腸はちぎるゝばかり。償ひ難き不臣の罪は、あの世で御詫仕らん。お赦しなされて下さりませ。

淨「人目なければやゝ暫し、不覺の涙に暮れけるが、稍あつて心づき、われながら不覺の至。大罪の御詫よりも、さしかゝるお家の安危……長門守にはいかにせしか。はて心もとなき……」

ト言ひつゝ、馬を二重上手物かけへ引行きて繋ぐこと。

淨「すかし眺むる折こそあれ、残霧劈き一さんに、走せ來る木村長門守、

ト向う揚幕より、長門守馬に乗りて馳來り、本舞臺の方をすかし見て、

木「市、正殿に候な。

市「長門殿待兼ねしぞ。

ト二重をおりる。

淨「言ふ間に駈寄る轡づら、右手におり立ち顔見合せ、詞はなくてそゝろにも、まづ袖濡るゝ朝露や。」

ト木村馬より下り立ち、且元と顔見合せ、暫くは無言にて落涙のこなし。頓て下手の柳の木へ馬を繋ぎて、舞臺の中央に進み、市、正と向ひ合ふ。

木「最早豊臣の御社稷も愈々末となつたるか。棟梁と頼む貴殿まで、佞人、讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。」

ト愁の思入ありて、市、正は傍の木に、重成は宜しくその下手に踏み、それがし圖らぬことよりして、はしなくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮のその間に、思ひ掛けぬ珍變あり。つゞいて貴殿に御討手と昨朝承り、大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論涌くが如く、織田入道殿日頃に似げなく、激論の末、席を蹴立て、唯今退座ありしとはばかり。跡は亂脈、無法の評定。御母公の威を笠に着る

御母公
秀頼の生母淀君。

織田入道
常真、俗名信雄。

渡邊
内蔵介。

大野、渡邊等が我意暴慢。この上は彼等を一刀に切つて捨て、腹搔つ切らんと再びまで、刀の柄に手は懸けしが、貴殿が日頃の教訓を、思ひいだして無念を忍び、無實と知つて忠臣を、救ひ得ざりし言ひ甲斐なさ。

淨「悔むを且元押しなだめ、

市「いしくも堪忍せられしぞや。かねてもしばく申せし如く、お家の大仇は彼等にあらざ。鼠輩のために命を捨つるは、大忠臣の所爲にあらじ。大切なるはお家の後事。某退去のこと關東に聞えなば、大亂破裂せんは目前なり。此の上は只偏へに、籠城の計畫こそ肝要なれ。

木「して籠城の計畫とは、何をもつて先とすべきか。

市「されば、今御城に兵糧金銀は乏しからず。まつた猛將、勇卒にも事缺かねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなし

置いたり。

木「してその智謀の將と申すは、

市「今九度山くぐさやまに隠れ忍ぶ、信州上田かみき前の城主、真田安房守が二男左衛門、佐幸村こそ、故大閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、先年お身方と爲し置いたり。合戦の駆引は一切かの仁ひとに任せられよ。

木「して又籠城となつたる曉、敵を防がん手配は、

市「その儀も豫て地理を考へ、出丸なくては叶ふまじと、先年紀州の山山より、材木あまた伐出させ、お船入に積みおいたり。まつた湊口の御藏には、年頃力めて購ひ置きたる、數萬俵の糧米あり。籠城數年に互るといふとも、尙支ふるに餘あるべし。

木「之に加へて故殿下が、貯へ置かれし數萬の金銀、近年御費用嵩むといへども、尙そこばくの餘財あり。

市「甲冑、兵具も乏しからず。

九度山
紀伊國伊都郡
の町。高野山
の北谷に當る。

木「城は名に負ふ南山不落。」

市「忠臣悉く心を一にし、あの堅城に立籠り、偏へに君家を守護すると
きんば……」

木「たとへ關東の老奸雄、利を啗はせ諸大名を懐け、六十餘州の兵を盡
くし、四方八方より攻寄すとも……」

市「中々三年四年が程には、攻落さんこと難かるべし、」

木「まつた若年には候へども、愈軍始まりなば、我又一方を承り、速見御

宿和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹

きひるがへさん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣將士心を一に

し、千變萬化の手を盡くさば、金石も亦透りぬべし。利慾に集まる

關東勢、なに退くるに難かるべきや、この上は仰に従ひ、この事君

に言上なし、直ちに軍の手配りせん、御心安かれ市、正どの。

市「ほ、頼もしし〜。只大切は上下の一致、必ず忠勤はげまれよ……」

速見

通稱出來丸。

夏の陣に戦死、

年十五。

御宿

正倫。又武田

政友に作る。

和久

名は宗豊、通

稱又兵衛。夏

の陣に戦死、

年八十一。

…とはいひながら往時に照らし、成り行く末をかんがみれば……

木「御母公の御氣質、社鼠に等しき大野渡邊。」

市「上、御發明に渡らせらるれど……」

木「讒佞これを覆ふが故……」

市「地の利はあれども人の和なく……」

木「故太閤が御威武に、をのゝき震ひ打伏せし、六十餘州の民草も……」

市「天の時にや大御所の自らなる徳風に、いつしか靡く世の有様。」

木「いかなれば斯くまでに、御運傾く西天の……」

トこの内あちこちにて鶏の聲。市「正落ちかゝつてゐる月を見やりて、

市「有明の影うすれつゝ……」

木「東天紅と八面に、かしましく鳴くくだけかけは……」

市「新日東天に昇るといふ……」

木「世の成行の……」

大御所
徳川家康。

兩「影なるか。

淨「是非もなき世の有様と、暫しは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほのくくと明けにけり。

此の時鐘の音聞ゆる。夜明の心。尙處々に鶏の聲。

市「後事をそこもとに託せし上は、最早思ひ残すことも無し。

木「して貴殿には是よりして……

市「居城茨木へ一まづ立越え……

木「と仰あるは受取り難し。もしもやこれが今生の……

市「あゝいや、潔き最期をだに遂ぐべき機会を失ひし市、正が命の拙さ、御詫の名こそ立たため、償ひ難き身の大罪。この身一つをとやかくと、千筋に迷ふ心の中。言ひかけて氣を換へいやなに、心ばかりはその後とても、君の御影に附添ひ参らせ、萬一にも杞憂的中なし、大事去りなんその時には……

木「某とても事破れて、御運の末となる時は、この世の思ひ出、奉公納め、

關東勢が眞中に、縦横無盡の血戦なし、華々しく討死なさん。

市「おゝ勇ましし潔し。某長らへ世にあらば、その目覺しき働をば、餘

所ながら見物なさん。尙再會は黄泉にて。

木「さやうござらば市、正どの。

市「随分堅固で……

木「貴殿にも……

淨「惜しきが中の生別離、まことやこれに比ぶれば、黄蘗は蜜にや似たるらん。駒引寄せて式退や、見返りがちに乗りうつる、秋さび月毛乗る人の、心やいかに片手綱。

トこの内木村は柳の木に立寄りて、馬の紐を解く。市、正は鐵扇を開きて、二重の上手へ合圖をする。

ト木村清藏二重の上手より以前の馬を引き出て、平舞臺へ下りる。

これにて市、正も木村も馬に乗る。

市「さらば。

木「さらば。

淨」と西東、見送る方に霧や立つ、眼や曇るおぼろ／＼、嘶く駒の聲はして、此の世に残す面影は、また見ぬ影とぞなりにける。

トこのうち市、正は二重の上へ、木村は平舞臺の下手へと馬を進め、互に見返ることよろしく。幕「桐一葉

一一 妹に諭す

吉田松陰

この間は御文下され、観音様の御洗米三日の精進にて戴き候やうとの御事、御深切の御志感じ入り申候。精進、潔齋などは随分心のかたまり候ものにて、宜しきことと存候に付、拙者も二月二十五日より三月晦日まで、少々志の候へば、酒肴ども一向食べ

吉田松陰

幕末の志士。名は矩方、通稱寅次郎。長門國萩藩士。安政六年歿、年三十。

妹

松陰の長妹千代子。此の文は安政六年四月十三日松陰

が萩の野山の獄から千代子に與へたもの。

靈神様

松陰の實家杉氏の祖先の靈。

法華經

佛教經典の名、妙法蓮華經。一部八卷二十八品ある。普門品はその第二十五。

ちんぢ

長州の方言、微塵の意。江戸の人屋傳馬町の獄。

申さず候。その間一度靈神様御祭のもの頂戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまでむつかしきことにもこれなく、御深切のことに候へば、相果したく存候へども、當所にては、當り前の精進の外に、また精進と申候ては、連中または番人ども何故と怪しみ尋ね候に付、それをそれと相答へ候こと面倒に存候故、八日は幸ひ精進日なれば、その日一日に戴き申候。

抑、「観音様信仰せよ」とのことは、定めし禍をよけ候ためなるべく、これは大いに論のあることに候へば、委細申進ずべく候。

法華經の普門品と申すに、観音力と申すこと高大に述べてこれあり候。大意は、観音を念じ候はば、繩目に懸り候ても忽ち繩がぶつ／＼と切れ、人屋に捕はれ候ても忽ち錠鍵が外れ、首の座に直り候ても忽ち刀がちんぢに折るゝなどと申してこれあり候。これは、拙者江戸の人屋にて、この經は幾度も繰返し讀みて

見候へども、始終この趣に候。それ故、凡人はこれより有難きことはなしとて信仰するも無理はなく候。

さりながら、佛の教は奇妙なる仕掛にて、大乘・小乗と二つに分ちて、小乗は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乗にて申候へば、観音は右の經文の通りのものと心得、ひたもの信仰せしむることに御座候。これは大いに信を起さすためなり。信を起すとは、一心に有難いことぢやとのみ思ひ込み、餘念・他慮なきことにて、一心不亂と申すもこのことなり。人は一心不亂になりだにせば、何事に臨み候てもちつとも頓着なく、繩目も人屋も首の座も平氣になられ候故、世の中にいかに難題・苦患の來るとも、それに退轉して、不忠・不孝・無禮・無道など仕る氣遣はなし。されど、初より凡夫に一心不亂の、不退轉のと申聞かせても、少しも耳に入らぬものゆゑに、假に觀音様を拵

へて、人の信を起させ候教に御座候。これを方便とも申候。

さてまた、大乘と申す方にては、出世法と申すことが肝要に御座候。出世と申候ても、立身出世などと申すことにては御座なく候。その初は、釋迦が天竺王の若殿に候ひしところ、若き時よ



り感の強き人にて、老人を見ては我が身も往先は老人にならんかと悲_吉が身も往先は老人にならんかと悲_田しみ、死人を見ては我が身も往先は_松死なんかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲みを發

し、生老病死がこの世の習なれば、是非にこの世を出ねば濟まずと志を立て、年二十五の時、位を棄てて山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。さ候て、三十出山とて、僅か五年の間に、生老病死を免るゝことを悟り、生れもせねば老いもせず、病

みも死にもせぬことを悟つて出て来て、それより世の人々を教化せられたり。これが即ち出世法と申すものなり。故に出世せねば濟世の出来ぬと申すもこのことなり。濟世といふは即ちこの世の人を濟度することに御座候。

さて、その死なずと申すは、近く申さば、釋迦の孔子のと申す御方は、今日まで生きて居らるゝ故、人が尊みもすれば有難がりもし恐れもするなり。果して死なぬに候はずや。死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も、前申す觀音經の通りには候はずや。楠木正成とか大石良雄とか申す人は、刃物に身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。即ち刀のちんぢに折れたる證據なり。

さてまた「禍福繩の如し。」といふことを御悟りあるが宜しく候。禍が福の種、福が禍の種に候。人間萬事塞翁が馬に御座候。

塞翁が馬
淮南子の人間
訓に出てゐる
故事。

七人兄弟

杉	民治	吉田寅次郎	杉	千代子	杉	此の宛名人	杉	門の妻	杉	小田村素子	杉	太田の妻	杉	艶子	杉	美和子	杉	久坂義助	杉	敏三郎
	(松陰)		(此の手紙)	(兒玉兵衛)	(小田村素子)	(門の妻)	(小田村素子)	(太田の妻)	(天)	(久坂義助)										

道常助之合百杉

拙者など人屋にて死ぬることに候へば、禍のやうには候へども、また一方には學問も出来、己のため人のため、後の世へも残り、かつく死なぬ人々の仲間入も出来候へば、福この上もなきことに候。人屋を出て候はば、またいかなる禍の來んも知れ申さず候。勿論その禍の中にはまた福も交り候へども、所詮一生の間難儀だにせば、先には福あるべし。何の效驗もなきことに、觀音に頼みて福を求むるやうのことは、必ずく無益に存候。

尤も右の如く申候へば、身勝手なる申分、不孝なる申分と御存じあるべきか。こゝにまた論あり。易の道は満盈と申すことを大いに嫌ふなり。お互に七人兄弟の中、拙者は罪人、艶は夭折、敏は啞子、ふざまの悪きやうなるものなれど、あと四人は何れも可なりに世を渡られ、特に兄様、そもじ、小田村は、兩人づゝも子供があれば、不足は申されず。世の中の六七人も兄弟のあるを

見較べよ。これほどにも参らぬ家の多きものぞ。近くはそもの家の家にも、高須などにも、兄弟の中には悪き人も随分あるなり。然れば、父母兄弟の代りに、拙者艶敏の三人が禍を受くるにこそと思ひ候はば、父母様の御心も濟まるゝ譯には候はずや。且、杉は随分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、却つて杉が氣遣なるものなり。拙者身の上は、前に申す通り、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後生の福は随分あれど、杉は今にては御父子とも御役にて、何の不足もなき中なれば、子供等がいつもこのやうなるものと思ひて、昔山宅にて父様母様の晝夜御苦勞なされたることを話して聞かせても、眞とは思はぬほどなれば、この先五十年、七十年の事を篤と手を組んで案じて見られよ、氣遣なるものにては候はずや。去年も端午に客の多きを、人はめでたし／＼と嬉しき顔をすれど、拙者は何分先の先が氣遣にて

御役

常道は治獄吏。

民治は藩學助

教。

山宅

杉常道隠棲の地、萩城の東方護國山の麓にあつた。

小太郎
民治の子。

たまらぬ故、始終稽古場に屈みて、人の知らぬ處にては、獨り落涙したるほどのことなりき。若しや萬一、小太郎が父祖に似ぬやうになることあらば、杉の家も危し／＼。父様母様の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にてもそもじまでぞ。小田村にてすら山宅のことはよくは覺えて居るまじ。まして久坂などは、なほ以てのこと。されば、拙者の氣遣に觀音様を念ずるよりは、兄弟甥姪の間に、樂は苦の種、福は禍の本。」と申すことを篤と申聞かす方が肝要なり。なほまた一つ、拙者不孝ながらも孝に當ることあり。兄弟の中に一人にてもふさまの悪き人あれば、あとの兄弟は自然と心が和ぎて、孝行するやうになり、兄弟も睦しくなるものなり。これより拙者は、兄弟の代りにこの世の禍を受合ふゆゑ、兄弟中は拙者の代りに父様母様へ孝行してくるゝがよし。さすれば、つゝまるところ兄弟中皆よくなりて、果は父様母

様の御仕合、また子供が見習ひ候へば、子孫のためこれほどめでたきことはなきにあらずや。よくく御勘辨候て、小田村久坂なんどへもこの文御見せ、佛法信仰はよきことなれど、佛法に迷はぬやうに、心學本なりと折々御見候へかし。心學本に、
のどけさよ願なき身の神まうで
神へ願ふよりは、身に行ふが宜しく候。〔俗簡襟〕

二二 無憂華

九條 武子

九條武子
歌人。男爵九
條良致妻。京
都市の人。昭
和三年歿、年
四十二。

女の涙は美しい。それはつめたい客觀の世界から離れて、極みな
き愛の泉よりしたゝり來る純情の一滴である。
しかし多くの女子は、之を自己の遊戯として弄ばうとする。そし
ていはゆる「涙の征服」が、つひに「涙の陷穽」となることに心づかない。

世に不良兒を救ひ上げた慈母の涙よりも、自己を偽つた技巧の涙が
多いのは悲しいことである。



九條武子

女子は涙そのものを卑しいものにしてはならぬ。むしろ涙によ
つて象徴されるつゝ、まじき
純情の、男子よりも多分に恵
まれてゐることを讚美せね
ばならぬ。

二

女性は弱きものとされて

ゐる。女性に對する幾多の同情が發せられるのはこの故である。
しかし世の婦人を論ずる士に通有な誤謬は、女性は先天的に弱者で
あるといふ前提に立つて見てゐることである。女性は本來決して
弱者ではない。だが女性が知らずくゝ男子の同情を要求してゐる

四

吾々はせめて、與へられた日々の糧カシの前に坐つた時だけでも、沁々しみとした心をもつて、箸を取上げたいと思ふ。一尾の魚に對してさへ、念佛して酬いられた親鸞上人の心持も、おのづから窺はれる。

一碗の飯も、粒々みな法縁の辛勞からさゝげられたものであると思へば、合掌せずにはゐられない親しさ、涙ぐましさを感じる。

吾々は天の恵と、地の福と、人の働きとを讃仰しよう。恵をたえず求めて已まぬのは、しほらしいことである。しかし常トク凡な現實の中にも、ゆたかな恵を見遁してゐるのは寂しいことである。

五

心に願ふすべてのものに恵まれてゐても、心から信じ、許し合ふまことの友は得難い。

互に信じ合ふことの出来るのは、互の人格を敬愛し合ふからである。

る。互の人格を信じ、心から許し合ふことの出来るのは、同じ信念の世界に限なき愉悅を抱きつゝ、俱に歩いてゐるからである。

しかし今日の社交と名づけられるものが、單なる追従と美辭の交換とに過ぎないのは悲しいことである。花を見て花の心に觸れぬこの寂しさの中に、見出したまことの友こそ、何に増しても尊いものである。

六

人間は誰しも正義を愛する。しかし何人も、正義の聲を聴き得る心をもつてゐても、自ら之を行ふところがなかつたならば、それは正義を愛する人ではない。

ことごとくが不正不義の中に、たゞ一人正義を守つてゆく人は尊い。しかし他の不正不義を顧みるところがなかつたならば、それは正義を擁護する人ではない。

自らも行ひ、人も行ふ。正義はそこに恆久不滅である。ゆゑによき人のをしへを慕ひ、正しき道のさとりを悦ぶ人は、また、よきをしへの擁護者であらねばならぬ。

七

美は人間の理想生活を形づくる最大の要素である。何人も美を求めてやまぬところに、完全性への憧憬に燃える人生が窺はれる。自然の姿が常住に、平明に、そして純粹の美しさを示してゐるのは、意志を交へた偽瞞の醜さがないからである。この故に粉飾された笑みよりも、寧ろ卒直な憤が美しいと思はれる場合がある。

何人も生活を美に導くことは大切なことである。自己にのみ恵まれた美を見出して、完全にこれを育んでゆくときに、美は一步を高めて、聖にまで至ることが出来る。

八

インスピレ
ション
靈感。

異郷に在つて故郷訛を聞いたときは、未知の人にさへも聲を掛けたくなる。故郷の強きインスピレーションは、それほどわれらの心を抱擁してゐる。

何の奇もない山にも水にも、われらの祖先がこゝの土に育ち、その榮えを願つて働いて來たことを思へば、何か知らず生命のこもつたなつかしさ、安らかさが感じられる。

候鳥のさすらひに似た生活を送つてゐる何人も、所詮還るべき故郷の土を忘れ得ない。何人も慕はしき心地をもつて土に還つてゆく。故郷に對する慕はしさの興へる最終の慰安は死である。

九

追憶は永久に若さと新しさとをもつてゐる。或時はほゝゑまじき慰めとなり、或時は用心深き戒をこめて、常に過ぎし日を蘇らせる。勿論、追憶に耽ることによつてのみ、慰安を貪るのは愚痴である。

が、近代人は知らぬ未來を逐ふことにのみ心惹かれて、自らの辿つて來た懐かしき過去に、何等の感激をも見出ださうとしない。

追憶を通じて過ぎた自分を眺めるとき、自己の過去が無爲に消えてしまつたのではなく、却つて慕はしく、しみぐと人生の深みそのものに觸れてゆくなつかしさを感ずるのである。この故に、追憶の感激を持たない生活を續けてゐる人は寂しい。

一〇

習慣を根柢から打破しようとする企は、われらの現に把持する文化を破壊せんとする暴舉に等しい。

習慣は既にわれらの生活と、不可分の要素となつてゐることによつて、われらの存在も決して一時的でないことを自覺させられる。と同時にわれらの世界は、先人の絶えざる努力によつて、こゝまで築き上げられたものであることを考へさせられる。

この故に、一も二もなく習慣を一蹴し去る者には、決してゆたかな
未來は恵まれない。われらは過去といふたしかな事實から逃れ得
ない以上、無始無終の生命への精進は、三世の因果を信ずる者に於て
始めて可能である。

二三 世界の四聖

高山樗牛

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人に非ず
んば誰かこれを能くせんや。釋迦孔子ソクラテス基督の四人、世呼
んで世界の四聖と稱す、宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。父
は淨飯王、母は摩耶夫人、其の本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王
家の族名にして、佛陀は其の出家成道せる後の尊號なり。釋迦、身は
一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九歳其

の妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隠れて道を修むること六年、終に
人生の奥義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天
竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿



しぬ。今の佛教は即ち釋迦
一代の教訓に基づく。蓋し
釋迦の當時、印度には幾多の
哲學ありき。されど徒らに
思索の高遠を欣びて人生の
疑問に適切ならず、偏に幽玄
なる談理と慘澹たる苦行と

によりて安心の道を求めたり。其の流派を樹てて相争ふ所は畢竟
名目上の優劣のみ、未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむる
に足らず。釋迦この間に生れ、其の浩大なる慈悲と無邊なる智慧と

を以て一世の木鐸となり、民をして其の歸依する所を知らしめたり。孔子名は丘、孔子は其の尊稱なり。今を去る二千一百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國



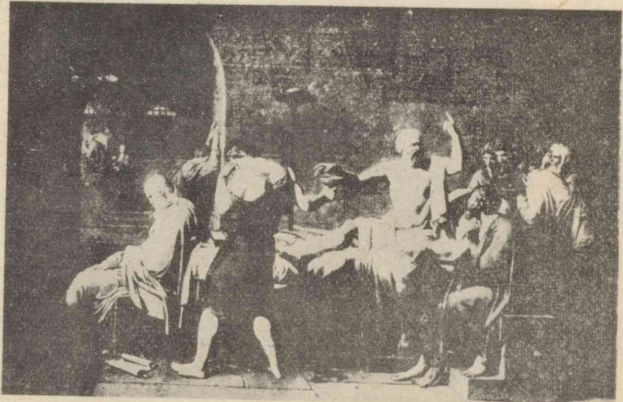
孔子像 (足利學校藏)

の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり、學徳愈々進む。魯の定公の時に至り、擢てられて大司寇の職に就く。治績大いに舉り、内外其の風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。

孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方に遊説を試みぬ。當時の支那は謂はゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を掃へり。或は臣にして其の君を弑するものあり、子にして其の親を害するものあり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頹廢、未だ曾てこの時のごときはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて狂瀾を既倒に廻さんとす。その志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世復耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く「嗚呼、吾が道終に窮せり。世終に吾を知るものなきか。」と。門弟子貢慰めて曰く「何ぞ夫子を知るものなからんや。」孔子曰く「天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す。吾を知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを疾む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と、幾ばくもなくして

天を怨みず
論語、憲問篇、
及び衛靈公篇。

歿しぬ。時に年七十三。



毒を仰ぐ人すのソクラテス

ソクラテスは希臘のアテネ府に住める一彫刻師の子なり。其の生れしは凡そ紀元前四百七十年の頃に於て、釋迦孔子と年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は、所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に留り、道徳は空文の上のみ貴ばれたり。其の状なほ釋迦當時の印度のごとく、人生社會の實際に關しては殆ど裨益するところ無かりき。ソクラテスは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦

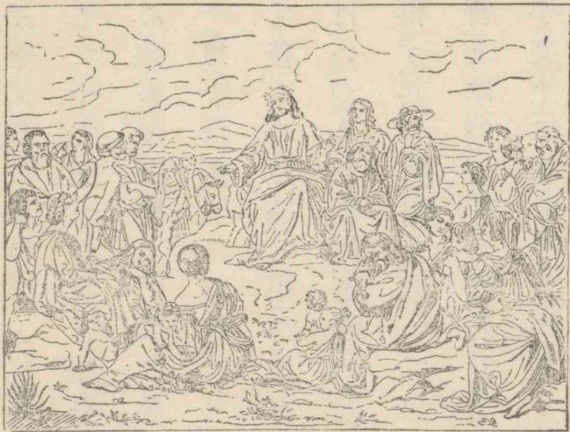
まず、詭辯學派の輩に遇へば、則ち其の獨得の論法を以て辯難攻撃して一步も假借せず、侃諤の正義、其の稀代の雄辯と相伴なひて、一世を風靡せり。然るに「喬木は風に折らるるの喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざるもの相謀りて、國法に背けるものとしてソクラテスを讒訴せり。其の訴狀に曰く、ソクラテスは國教を信ぜずして異教を勸め、以て人心を惑亂せり。國法によりて死刑に處すべし。」と、ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て、國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども、判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く「命のみ」と。其の獄中にあるや、常に其の門弟を集めて生死・靈魂・未來の事を説き、人の脱獄を勸むるものに對しては、輒ち答へて曰く、「予は唯正義に導かれんのみ。死また何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上にある

アスクレピオ
ス
醫術の神。

と知らずや。」と。終に從容として毒を仰いで歿しぬ。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く、爾一鶏を以てアスクレピオスの神に捧げよ。」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテスは此の如くにして逝きぬ。年七十。

基督は本名を耶蘇といふ。基督とは膏灌がれたる者といふ義にして、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベトレヘムに生る。西曆紀元第一年は其の生後四年に當れり。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名はマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして其の福音を傳へたり。當時羅馬帝國は榮華已に其の極に達し、禍亂の萌芽、其の中に胚胎し、災異荐に至りて天下寧日なし。殊に基督の故國たる猶太は、久しく暴君の收斂

に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒らに珍奇の淫祠を崇拜して、ますます放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。此に於て、一世の人心は悉く偉



キリストの上の垂調

人の現出してこの暗黒の社會を照破せんことを渴望せり。基督この間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子なりと稱し、昂然として其の偉大なる新教理を宣傳せしかば、遠近靡然としてこれに赴く。僧侶學者官吏等これを喜ばず、猥りに新法異説を唱へて民を惑はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督豫め此の事あらんことを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く、神よ彼等を赦せ。彼等は其の爲すべき所

を知らざればなり。」と。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、「イェルサレムの女子よ、我が爲に哭く勿れ。唯己と己の子との爲に哭け。」と。かくの如くにして基督は三十三年を一期として十字架上の露と消去りぬ。基督死して後、其の弟子等は激烈なる迫害に抵抗して其の教を天下に弘めぬ。基督教即ち是なり。

以上は四聖の略傳なり。其の人物事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の敬慕し、崇拜すべき所なり。而して四聖の中釋迦を除きては、いづれも輓軻不遇の間に其の生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とはいづれも讒人の手に罹り、或は毒を仰ぎ或は盜賊と並びて十字架上に磔殺せられたり。慘憺たりと謂ふべし。然れども是等の人々の志す所は天下後世にあり。現世の禍福と一身の安危とは毫も其の顧慮する所にあらず。故に其の死に就くや、晏如として恰も

歸するが如し。孔子は其の一身の不幸を憂へずして、却つて「吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と嗟歎せり。釋迦は衆生のために其の妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に逢うて揚言して曰く、正義を信ずるものに取りて死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか。其の一日即ち國民の迷を覺さざるべからず。」と。基督は己を罪に陥るもののために神に祈りたり。嗚呼何ぞ其の慈悲の浩大にして無邊なるや。

四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してその教の今なほ凜々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、これに憑りて道念を養ひ、其の安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。其の遺徳の高大なること、何を以て是に比せんや。

豊島與志雄
小説家。明治
二十三年福岡
縣生。

二四 梅花の氣品

豊島與志雄

梅花の感じは氣品の感じてある。

氣品は一の芳香である。目にも見えず耳にも聞えない或風格から發する香である。甘くも酸くも辛くもなく、其らのあらゆる刺激を超越した、えもいへぬ香である。人をして思はず鼻孔を膨らませる無味無臭の香である。それと明らかに捉へることは出来ないが、それと明らかに感じ識られる一種獨得の香である。何故にともなく、どこからともなく、どこへともなく、おのづから發散して漂つてゐる浮游の香である。

これはまた梅花の香である。うつすらと霧の罩めてゐる未明の微光に、或は淋しい冬の日の明るみに、或は佗しい夕の靄に、或は冷々とした夜氣に、仄かに織込まれて、捉へがたく觸れがたく、たゞ脈々と

漂つてゐる一種獨得の梅花の香は俗塵を絶した氣品の香である。その香を感じてその花を求めるのは、俗であり愚である。花のありかを求めないで、漂つて來る芳香に心を澄す時、氣品の本體を識ることが出来る。

氣品はまた一の凛
乎たる氣魄である。
衆に媚びず、孤獨を恐
れず、己の力によつて
自ら立ち、驕らず、卑下



梅 月 (荒木寛欣筆)

せず、霜雪の寒さにも自若として、己自身に微笑みかける搖ぎのない氣魄である。肥大でなく、矮小でなく、膨脹せず、萎縮せず、賑やかでなく、淋しくなく、たゞあるがまゝに充ち満ちて、空疎を知らず、漲溢を知らず、恐れることがなく、蔑むことのない、清爽たる氣魄である。

これはまた梅花の氣魄である。霜雪の寒さを凌ぎ、自らの力で花を開き、春に魁して微笑み、しかも驕ることなく、卑下することなく、爛漫たる賑やかさもなく、荒涼たる淋しさもなく、たゞ靜かに己の分を守つて、寒空に芳香を漂はしてゐる梅花の姿は、氣品そのものの氣魄である。しみじみと梅花に見入ると、恐怖や蔑視や悲哀や歡喜など、すべて心を亂すやうな情緒は靜まつて、たゞ氣高い氣品の氣魄に打たれるであらう。

氣品はそれ自身の性質からして、清淨であり白色であるべきである。赤や青や黄など、何等かの色に染められた氣品は世に存しない。もとより赤や青や黄や紫など、さういふ色彩を持つことの出来る氣品はあるけれども、氣品そのものの色はどこまでも白色である。しかし、單に白色だけでは足りない。純白の氣分を破らない程度に於て、何等かの點彩を要する。鮮かな一點の色彩を包んだ純白、それが

氣品の色である。

これはまた梅花の色である。黎明や薄暮の微光の中に浮出す灰赤いまでの白色、白晝の外光や深夜の闇の中に浮出す灰蒼いまでの白色、また月光に照し出される薄紫にまがふまでの白色、その白色の花弁の中に花粉の黄を小さく點出した色彩は、氣品そのものの色彩である。これに瞳を凝らす時、おのづから心すが／＼しくなつて、氣品の妙趣を悟ることが出来る。

氣品には一の濫味があり、しかも同時に一の新鮮味がある。氣品は舊陋でもなく新奇でもない。純粹の氣品は、骨董と新考案とを包含し、兩者を調和したものである。老と若と舊と新とを寄せ集めて、しかもそのどれでもなく、老と舊との濫味を取り、若と新との新鮮味を取つた一種恆久的のものである。古さから來る佶屈聱牙と、新しさから來る自由暢達と、この兩者を具有して、しつくりと落着いたも

のである。

これはまた梅花の落着である。鋭角度をなしてぐいぐいと曲つた古木から、すいぐいと若芽を伸ばし、若きを育てる力を内に藏した老幹と、老を生かす力で伸上る若枝とが、しつくりと一つの氣分に纏まつて、苔の生えた古い樹皮と、艶々しい新たな樹皮とが、一樣に花を開いてゐるのは、正に氣品そのものの姿である。老いた枝にも若い枝にも、一樣に咲匂つてゐる梅花を眺めると、輕佻と鈍重とを超越した氣品の沈靜に味到することが出来る。

氣品はこの世には稀である。それは地上のものといふよりも、むしろ多く天上のものであるからである。地上ではその本來の面目を汚されるといふのではないが、そこに在るにはあまりにそれが清らか過ぎる。しかし、それを地上に引下して己の所有としたところに、人の魂の朗かさがある。地上から天上へと人の魂が架け渡した

多くの橋梁の中の一つが、そこにあるともいふことが出来る。それゆゑ、氣品はどんな人にも親しまれ易い。

梅花の感じは氣品の感じである。けれども、梅花は一の抽象でなくて、一の具象である。随つて人に親しまれ難い。あまりに芳しい香を漂はせ、あまりに凜乎たる氣魄を示し、あまりに清らかな色彩を有し、あまりに妙味のある樹に咲くので、人間ばなれのした感じを以て人を卻けがちである。しかし、梅花に瞳を定め、その香に心を澄すことは、必ずしも詩人にとつてばかりでなく、普通の人にとつてもよい。なぜかといふに、それは地上の息吹に天上の息吹を交へることだからである。梅花には人間味が少いから、新たな心を以て梅花に接し、新たな心を以て梅花に親しむことは、人間にとつて益、よい。この意味に於て、眞に梅花を観るのには、雑沓の巷や、廣い梅林や、人工的な盆栽や、または月明の夜などに於てよりも、むしろ自由な晴れぐ

とした境地に於てするがよい。必ずしも美景を要しないが、たゞ自然の風趣の害せられてゐない伸びやかな環境の中に、一本の老木が、自然のまゝの枝ぶりに、ぼつり／＼と花を着け、仄かな香を漂はしてゐるのを、少し冷かな二月の夜明、薄霧の晴れやらぬ頃、爽かな空気を吸ひ、小さな霜柱を踏んで、ふと氣づいたまゝ、何氣なく足を止めてしみじみと見入り嗅入る心持、それこそ眞に梅花を觀る境地である。その一本の老樹のたゞずまひと、その清らかな花の姿と、その脈々たる香と、その清冷な早朝の空氣とは、ともに梅花の氣品となつて、人の心に沁通るであらう。これをも卑俗といふのは、卑俗ばかりを知つて高潔を知らぬからである。

二五 日本趣味

芳賀矢一

古代人類も美しい曲玉を造つて身の飾とした。眞澄の鏡を造つ

芳賀矢一

國文學者。文學博士。東京帝國大學教授。福井市の人。昭和二年歿、年六十一。

て自分の姿を映した。銳利な刀劍を造つて武者振ひした。情熱燃えるが如き歌も詠んだ。優婉にして花の如き文章も綴つた。山水の間に逍遙しては、その幽邃を探り、その清楚をたづねて、或は美想を吐き、或は雅趣を抒べた。花の散るのにも涙を濺ぎ、鳥の啼くのにも心を傷めた。かくして自ら慰めたばかりでなく、時には之を以て人と人との愛着を告げ、時には之を以て人と神との交渉に用ひた。これ趣味が高かれ低かれ、人間生活の一大要素たるを示すものである。趣味生活は知識の進歩につれて向上すべきである。かの知識の點からは批評するに足らぬほど蒙昧な時代においても、趣味性の自由に發育した民族には、後世から見ても驚かれるほどゆかしい趣味生活を營んでゐたものもある。たゞ古代における趣味の種類と範圍と程度とは、單純で、狭少でかつ低級であつた。

理知の進歩につれて、趣味性よりする文化生活も廣汎になり、複雑

になり、かつ高尚になる傾向のあるのは、勿論であるけれども、情操の涵養を放漫にしておく時は、理知の進歩が必ずしも趣味生活を高尚に導くとは斷言できない。

我が國史の上にはあらはれた趣味も、また同じく此の徑路を辿つて今日に及んでゐる。趣味史の上から民族や國民の特性を觀察するのは、頗る興味あることである。我が日本國民の文化生活は、その由來する所が甚だ久しいもので、夙に外國から輸入した文化をよく同化して、我が國民自身の文化生活を向上させて來たのは、わが理知性と趣味性との偉大なことを物語るものであらう。

素盞之雄尊の詠歌、天鈿女命の舞踊の如きは、邈たる神代の傳説であるにしても、神武天皇の御製が幾首も傳はつてゐるのを見れば、皇祖の御性格が優雅にましました程も察し奉られるのである。爾來我が國に文學趣味が普及して、萬葉集をはじめとし、勅撰二十一代集

素盞之雄尊の詠歌
やくもたついで
づもやへがき
つまこみにや
へがきつくる
そのやへがき
な。(古事記)

天鈿女命

天照大神が天の岩戸に籠られた時、その舞踏で大神を誘ひ出し奉つたと傳へられる。

萬葉集

仁徳天皇から天平寶字三年頃までの作を集めた我が國最古の歌集。

二十一代集

古今・後撰・拾遺・後拾遺・金葉・詞花・千載・新古今・新勅撰・續後撰・續古今・續拾遺・新後撰・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今和歌集。

人麻呂・赤人

や諸家の集を讀めば、人麻呂や赤人とか、六歌仙や、三十六歌仙とかの歌その物の文學的價値よりも、菅原道眞が配所の月に吟じたのや、河部仲麻呂が唐土の月に詠じたのや、八幡太郎義家が遠征の途上に落花を惜しんだのや、後鳥羽上皇が隱岐の島守とならせられながら歌の御會を催されたことなどは、同巧異曲な趣味の發揮をなつかしませるのである。

文學趣味のみに耽溺すれば、人間の性行が優柔不斷に流れ易い。我が國民は本來尙武の氣象にも富んでゐる。随つて甲冑刀劍弓矢など武具の製法にも大いに意匠を凝らしたものがあつた。中にも刀劍の製法には熱誠を捧



(筆重廣川歌) 宗正工劍

柿本人麻呂、山邊赤人。共に奈良朝の歌人。

六歌仙

在原業平・僧正遍昭・小野小町・喜撰法師・文屋康秀・大伴黑主。

三十六歌仙

人麻呂・貫之・射恒・伊勢・家持・赤人・業平・遍昭・素性・友則・猿丸大夫・小町・兼輔・朝忠・敦忠・高光・公忠・忠岑・齋宮女御・賴基・敏行・重之・宗子・信明・清正・順・興風・元輔・是則・元眞・小大君・仲文・能宣・忠見・兼盛・中務。

正宗

岡崎五郎入道

げたものが多く、名工としては、正宗を第一として、義弘・吉光・宗近・安綱・友成・則宗など、日本刀の威名を恣にして居る。畏くも天皇の御身で鍛刀の術に長けさせられた御方もあつた。幾百回の鍛冶研磨を経た名刀は、秋水滴るばかりで、明玉の上にも一點の塵も止めないやうな崇高さである。刀の鏝や目抜などにも美しい意匠を凝らしたのも澤山あつて、それが多數大英博物館などに陳列してある。英人などが之を見て、この殺人の道具に美術の技巧を加へた日本人の優美な心もちに感心してゐる。

建築の方面を觀るのに、出雲の大社・伊勢の皇大神宮・奈良の東大寺・平安時代の古社寺を始として、金閣寺・銀閣寺・日光の東照宮・舊幕時代の各城郭より、一般都鄙の民屋の構造・庭園の風致に至るまで、その目的と位置とによりて、規模様式は千差萬別であるけれども、何れも皆我が國民の頭腦中に描かれた意匠と趣向との反映であるのは一て

ある。

室内生活に就いて考へて見るのに、間取の具合、床の間・欄間の掛物・

と號す。康永二年歿、年八十一。鎌倉の刀匠。
義弘 正宗の門人。郷氏、越中の入。建治・弘安頃の人。
吉光 山城粟田口の人。建治・弘安頃の人。
宗近 山城の刀匠。三條小鍛冶と稱す。長元六年歿、年七十。
安綱 伯耆國大原の刀匠。大同年間の人。
友成 備前の刀匠。永延・正暦年間の人。
則宗 備前の刀匠。備前太夫と稱す。元暦頃の人。



圖六 兼 澤 金

が國民の腦裡に深く浸潤し、生活の各方面に流れ出て居る。江戸時代は正に其の渾成期であつた。

額にも、陶磁器・漆器の繪模様にも、彫刻物などにも、我が國民の精神が發露されてゐる。殊に富裕にもあらぬ家庭でさへ、茶・生花・琴・三味線を玩んで居るのは、多年修練して來た風雅な生活ぶりではないか。茶道が我が國民の生活に韻致を加味したことは争はれない事實である。茶味と禪味と俳味とは三にして一、一にして三。この三味は渾融溶化されて、我が國民の腦裡に深く浸潤し、生活の各方面に流れ出て居る。江戸時代は正に其の渾成期であつた。

出雲の神社
出雲杵築町に
ある。祭神大
國主命。
東大寺
華嚴宗の大本
山、聖武天皇
の御建立。
義政
足利八代將軍。
紹鷗
武野氏。泉州
堺の人。利休
の師。永祿元
年歿、年五十
三。
利休
泉州堺の人。
千家流茶道の
祖千宗易、利
休はその號。
天正十九年歿、
年七十一。

銀閣寺に往つて観ると、今日でも四疊半の瀟洒な茶室で抹茶の接待を受ける。それで遊覽者はおのづから義政將軍の風韻を想像するのである。豊太閤に至つて、茶の湯は更に盛となつた。紹鷗だの、利休だのといふ名人が頭を擡げて、一代の宗匠ぶりを示した。茶の湯には清寂簡素を尙ぶけれども、目に見えぬところに一種の凝があつて、言ひしらぬ風韻を呼起すものである。そこで是に幾つも流派が出来て、普く茶道が傳播して來た。

禪味の傳播は宗教的ではなく、武士たるものの一種の精神修養上から味ははれて、その深沈靜慮の工夫が武士的修練に適するとされたからである。武士で參禪するものも少くなかつた。茶の清寂と禪の沈靜とは共通の點がある。俳諧もまた歌の優雅に似ず、婉麗に流れず、嬌態に走らず、卑俗と見えて脱俗したるところ、民衆的であつて閑寂の一體を成したことは、茶味禪味と合致し易い點がある。



歌仙中務圖 (岩佐又兵衛筆)

埼玉縣川越市東照宮の拜殿に懸けられた三十六歌仙の一つであつて、岩佐又兵衛の眞蹟である。又兵衛の筆と稱せられる風俗畫は少なくないが、大抵は眞の又兵衛の筆ではなく、無落款の風俗畫を又兵衛筆と稱するに過ぎない。然るにこの三十六歌仙は又兵衛の筆なることは確で、額の裏に寛永十七庚申年六月十七日繪師土佐光信末流岩佐又兵衛尉勝以圖とある。なる程この歌仙の繪は土佐流なることは一見明らかである。たゞこれは、東照宮に奉獻する爲に畫いたのであるから、特にかやうな嚴格な描法を用ひたのであらう。長頤豐頰の美人畫の特色を發揮して、勝以の特色がよく現れてゐる。

(藤懸靜也)

紫式部

藤原宣孝の妻。

上東門院に仕

へた。長元四

年歿、年五十

七。

清少納言

清原元輔の女。

一條天皇の后

定子に仕へた。

歿年不詳。

西鶴

浮世草子の作

者。又俳人。

大阪の人。元

祿六年歿、年

五十二。

門左衛門

淨瑠璃作者。

近松氏、號は

巢林子、又は

平安堂。長州

萩の人。享保

九年歿、年七

十二。

岩佐又兵衛

浮世繪の始祖。

名は勝以。寛

永年中最も弘

く行はれた。

また紫式部・清少納言以下の才媛が、平安時代を飾つて居るやうに、西鶴や門左衛門は江戸時代の町人趣味を物語つてゐる。江戸時代の三絃樂及び演劇の發達もまた著しい偉觀である。

江戸時代に起つて大いに時好に投じたるものに浮世繪といふものもある。從來の繪畫は、多くは支那の畫風に摸倣し、その山水・人物など、主として支那の形態を描寫したやうであつたが、岩佐又兵衛といふ人が出て、當時の風俗を描きはじめてから、菱川派・歌麿派・歌川派・北齋派などの諸派が續出して、それ／＼旗幟を樹てた。殊に元祿年間には風俗が華奢を極めて、一時代を劃するほどの情態であるのを、浮世繪師の巧みに寫實したのなどは、平民文學の發達と共に、最も目ざましい事である。

着物の紋所は先祖を崇び、系圖を重んじた我が國風から出たので、世界に無比なものである。しかもその意匠にあらはれた嗜好にも、

慶安三年江戸に歿。
 菱川派 菱川師宣の門流。
 歌麿派 北川歌麿の門流。
 歌川派 歌川豊春の門流。
 北齋派 葛飾北齋の門流。

日本人の國民性がほの見えるのである。
 今や外國思想の輸入は底止する所を知らず、我が國民の之に對する態度は、たゞ好奇心に驅られるばかりで、咀嚼玩味と選擇取捨とに意を用ひる暇がなく、外國趣味の歡迎せられてゐるものの中には、輕浮で醜穢なものもあつて、從來の國民性を傷つける憂がある。民族心理學や歴史哲學の研究上から品評すれば、低級な趣味生活に甘んじて居る國民は賞揚しようとしても賞揚することが出來ない。我が國民たる者も一時の迷夢から覺めて、眞に日本趣味の向上を計らなければならぬ。「日本趣味十種」

自修文

出家と其の弟子

倉田百三

場所 西の洞院御坊。

本堂の下手にあたる僧の控へ間。高殿になつて居て京の街を望む。直ぐ下に通路あり。通行人あり。

人物 親鸞 七十五歳。松若改め唯圓 十五歳。僧三人。其他。
 時 秋の午後。

今日 法然上人の法會の日。

僧一「今日の法話はどなたがなされるので御座いますか。
 僧二「私が致す筈になつて居ます。
 僧三「どの様な事に就いてお話しなさるお積りですか。
 僧二「法悦といふことに就いて話さうと考へて居ます。佛の救を信する者の感ずる喜ですな。經に所謂踴躍歡喜の情ですな。富も要らぬ、名譽も欲しくない、私にはそれよりも楽しい法の悦があります。その悦があれば

倉田百三 創作家。明治二十四年廣島縣生。

こそ此の年まで墨染の衣を着て、貧しく暮して来たのですからね。
僧一「さうですとも。私は他人の綺羅を羨む氣はありません。私は心に目に
見えぬ錦を着て居ると信じて居りますから。」



三田百三

僧二「私は今日話さうと思ひます。皆様
は此の法悦の味を知つて居ますか。
若し此の味を知らないならば假令
皆さんは無量の富を積んで居よう
とも、私は貧しい人であると斷言致
しますと。(眉を聳やかす)

僧三「それは思ひきつた、強い宣言ですな。
僧二「若い息子や娘たち——私は言はうと思ひます。皆様は此の法悦の味を
知つて居ますか。若し此の味を知らないならば、假令皆様は楽しい人生
に酔はうとも、私は憐むべき人々であると斷言致します。」

僧三「若い人々は耳を軟てるでせうね。」

僧二「私から何でも奪つて下さい——私は言はうと思ひます。富でも名譽で

も愛でも。たゞ併し此の法の悦だけは残して下さい。それを奪はれる
ことは私に取つては死も同じ事です。」

僧一「丁度私の言ひたいことをあなたが言つて下さるやうに、いゝ氣持がしま
す。」

僧三「私も同じ心です。其の悦が無くては、私達は實に慘めですからね、僧ほど
詰らないものはありませんからね。私も其の悦で生きて居るのです。」

僧二「私は、其の悦は私達の救はれて居る證據であると言はうと思ひます。私
達は此の穢れた娑婆の世界には望を置かない、安養の淨土に希望を抱い
て居る。私達は病氣をしても死を怖れることはない。死は私達に取つ
て失でなくて得である。安養の國に往いて生きるのだからである。此
の様な意味の事を話さうと思ふのです。」

僧三「それは皆本當です。私達信者の何人も經驗する實感です。」

僧一「昔から開山達が、一生涯貧しく而も悠々として富めるが如き風があつた
のは、皆心の中に此の踴躍歡喜の情があつたからだと思ひます。」

僧二「唯圓殿、あなたは何を考へ込んで居られますか。」

僧三「大層沈んでいらつしやいますね。」

僧一「顔色もすぐれませんがね。お氣分でも悪いのではありませんか。」

唯圓「いゝえ、只何となく氣が重いので御座います。」

僧三「その様に氣の滅入る時には、佛間に坐つて念佛を唱へて御覽なさい。明るい、冴え／＼した心になります。」

唯圓「左様で御座いますか。」

僧一「大きな聲を出してお經を讀むとよう御座います。」

僧二「一つは信心の足りないせゐかも知れません。氣を悪くなさいますな。」

私は年寄だから言ふのですからね。だが佛様のお慈悲を戴いて居れば、何時も心が嬉しい筈ですからね。何時も希望が充ちて居なくてはなりません。また佛様の兆載永劫の御苦勞を思へば、感謝の念と衆生を憐む愛とが常に胸に溢れて居なくてはなりませんからな。法悦のないのは信心の獲得が出来て居ない證據だと思ひます。氣を悪くなさいますな。いや若い時は誰でもそんなものですよ。

僧一「おやお勤の始まる鐘が鳴つて居ます。」

僧三「本堂の方へ參らなくてはなりません。」

僧二「では御一緒に參りませう。唯圓殿は？」

唯圓「私はお師匠様のお給仕を致しますので。」

（三人の僧退場。唯圓暫く沈黙。やがて茶器を片付け、立ちあがり、廊下に出で、柱に身を倚せかけ、ほんやりして下の道路を見て居る。商家の内儀と女中と下の道路の端に登場）

内儀「今日は澤山なお參りだね。」

女中「いゝお天氣で御座いますからね。」

内儀「随分埃が立つことね。（肩を擧む）」

女中「お髪が白くなりましたよ。」

内儀「さうかい。（手巾を出して鬚を拂ふ）少し急いで歩いたものだから、汗がじつとりしたよ。（額や頸を拭く）」

女中「ほんに少し暑すぎる位でございます。」

内儀「線香に、米袋に、お花、皆ありますね。」

女中「皆ちやんと揃つて居ります。」

内儀「おやお勤の鐘が鳴つてるよ。
女中「丁度よい處へ参りました。

内儀「早く本堂の方へ往きませう。(道路の向うの端に退場

親鸞「登場。唯圓の後に立つ」唯圓々々。

唯圓「振向く。親鸞を見て顔を赤くする」

親鸞「そんな處で何をして居る。

唯圓「ぼんやり街を通る人を見て居りました。

親鸞「今日は好いお天氣ぢやの。

唯圓「秋にしては暑いくらゐで御座います。

親鸞「澤山な参詣ぢやの。

唯圓「はい。此處から見て居ると色々な人が下を通ります。

(丁稚二人登場。角帯をしめ、前垂をかけ、白足袋を穿いてゐる。印の入つた葛籠を

載せた車を一人が曳き、一人が押してゐる)

稚一「もつとゆつくり行かうよ。

稚二「でも遅くなると又叱られるよ。

稚一「私は草臥れた。

稚二「また昨夜の様に居睡するとやられるよ。



親 鸞 像

稚一「でも睡くて

睡くてしや

うがなかつ

たのなもの。

稚二「随分暑いね。

(手で汗を拭く)

稚一「そんなに草

履をばたば

たさせな。

稚二「澤山な人だ

ね。

稚一「皆お寺参りだよ

稚二「見せ物の看板でも見て往かうか。

自修文 出家と其の弟子

稚二「一寸誘惑を感じたらしく立止る」でも遅くなると叱られるから、早く往かうよ。(退場)

親鸞「世の様々な相が見られるな。私は昔から通行人を見て居ると寂しい気がしてな。

唯圓「私も先刻から其の様な気がして居たのです。

親鸞「此處で暫く休んで行かうか。

唯圓「それがよろしう御座います。(座蒲團を持つて来て敷く)今日はよく晴れて比叡山があつた様にはつきりと見えます。

親鸞(坐る)「あの山には、今も澤山な修行者が居るのだがな。

唯圓「あなたも昔あの山に長くいらつしやつたのですね。

親鸞「九つの時に始めて登山して、二十九の時に法然様に遇ふまでは大抵あの山で修業したのだ。

唯圓「その頃の事が思ひ出されませうね。

親鸞「あの頃の事は忘れられないね。若々しい精進と憧憬との間に眞面目に一筋に煩悶したのだからな。森なかで靜かに考へたり、漁るやうに經典

を讀んだりしたよ。また夕方など暮れて行く京の街を眺めて、あくがれる様な寂しい思ひしたものだよ。

唯圓「では私の年にはあの山にいらしつたのですね。どの様な氣持で暮して居られましたか。

親鸞「お前の年には、私は不安な氣持が次第に切迫して來た。苦しい時代だつた。お經を讀んでも、私の心にしつくりとしないのだからな。それに私は其の不安を心に收めて、全然孤獨で暮さねばならなかつた。

唯圓「同じ年輩の若い修行者が、澤山近くに居られたのではないのですか。

親鸞「何百といふ程居たよ。恐ろしい荒行をする勇猛な人や、夜の目も惜しんで研究する人や、また仙人の様に清く身を保つ人や、様々な人が居た。私も其の人々のするやうな事を後れずにした。随分思ひきつた行もした。しかし私の心の中には、其の人々には話されぬやうな寂しさがあつた。人生の愛と悲みに對するあくがれがあつた。話せば取合はれないか、或は輕蔑されるかだから、私は其の心持を一人で胸の中に守つて居た。其の寂しさは私の心の中で段々と他には知れずに育つて行つた。私が

愈、山を下る前頃には其の寂しさを破産しさうな気がした位だったよ。
唯圓「お師匠様、私は此の頃何だか寂しい気がしてならないのです。時々ぼんやり致します。今日も此處に立つて通る人々を見て居たら、ひとりで涙が出て來ました。」

親鸞（唯圓の顔を見る）「さうだらう。（聞）お前は感じ易いからな。」

唯圓「何も別に是と云つて原因はないのです。しかし寂しいやうな、悲しいやうな気がするので。時々泣けるだけ泣きたい様な気がするので。永蓮殿は體が弱いせむだらうと言はれます。私もさうだらうかとも思ふのです。けれどさうばかりでもないやうに思はれます。私は自分の心で解りません。私は寂しくてもいゝのでせうか。」

親鸞「寂しいのが本當だよ。寂しい時には寂しがるより仕方はないのだ。」

唯圓「今に寂しくなくなりませうか。」

親鸞「どうかね。もつと寂しくなるかも知れないね。今はぼんやり寂しいのが、後には飢ゑるやうに寂しくなるかも知れない。」

唯圓「あなたは寂しくはありませんか。」

親鸞「私も寂しいのだよ。私は一生涯寂しいのだらうと思つて居る。尤も今の私の寂しさは、お前の寂しさとは違ふがね。」

唯圓「どの様に違ひますか。」

親鸞（憫むやうに唯圓を見る）「お前の寂しさは對象によつて癒される寂しさだが、私の寂しさはもう何物でも癒されない寂しさだ。人間の運命としての寂しさなのだ。それはお前が人生を経験して行かなくては解らない事だ。お前の今の寂しさは段々形が定まつて、中心に集注して來るよ。其の寂しさを凌いでから本當の寂しさが來るのだ、今の私の様な寂しさは、しかし斯の様な事は話したのでは解るものではない。今にお前自ら知るやうになるよ。」

唯圓「では私はどうすればいゝのでせうか。」

親鸞「寂しい時は寂しがるが、いゝ。運命がお前を育ててゐるのだよ。只何事も一筋の心で眞面目にやれ。ひねくれたり、ごまかしたり、自分を欺いたりしないで、自分の心の願に忠實に従へ。それだけ心得て居ればよいのだ。何が自分の心の本當の願かといふことも、すぐには解るものではな

い。様々な迷を自分で造り出すからな。しかし眞面目でさへあれば、それを見出す智慧が次第に磨き出されるものだ。

唯圓「あなたの仰しやる事はよく解りません。しかし私は眞面目に生きる氣です。

親鸞「うん。お前には素直な一向むきな善い素質がある。私はお前を愛してゐる。其の素質を大切にしなければならぬ。運命に眞直に向へ。智慧は運命だけが磨き出すのだ。今はお前は年の割に幼いやうだけれど、さきでは大きくなれるよ。

唯圓「先刻私は智應殿に叱られましたな。

親鸞「何と言つて。

唯圓「私が寂しいのは信心が足りないからだと言つて。佛様の救を信する者は法悦が無ければならぬ。其の法悦は救はれて居る證據だ。踴躍歡喜の情が胸に満ちて居れば寂しい事はない。寂しいのは救はれてない證據だと仰しやいました。

親鸞「ふん。(考へてゐる)

(兩人暫く沈黙。僧一僧三登場)

僧一「お師匠様は此處にいらせられましたか

親鸞「唯圓と日向で話してゐました。

僧三「御氣分は如何で御座いますか。

親鸞「もう大抵よいのだよ。有難う。

僧一「それは嬉しい御座います。大切に遊ばして下さい。

親鸞「お前たちも此處でお話しなさい。本堂の方はどうだった。

(唯圓座蒲團を持來り、兩人に薦め、茶をつぐ。)

僧三「一杯の參詣人で御座います。お勤が濟みまして、今は智應殿の説教最中で御座います。

僧一「智應殿の熱心な説教には、皆感動した様で御座いました。

僧三「權威のある、強い説教でした。皆畏まつて聽聞致して居ました。

僧一「今日の説教は殊に上出來で御座いました。

親鸞「やはり法悦といふ題でしたのだな。

僧三「御存じでいらつしやいますか。

親鸞「智應が私に話したこともあるし、さつき唯圓から一寸聞いた。

僧一「宗教的歡喜といふものが、如何に富や名譽など、地上の樂みよりも勝れて

尊いかを高調して御話しなされました。

僧三「何ものよりも楽しいとさへ仰しやいました。

唯圓「死の恐怖もなく、孤獨の寂しさもなく、浮世への誘惑も無いと仰しやいました。

僧一「法悦は救の證據であると言はれました。

僧三「私達出家してゐる者の特別に恵まれた境遇であることを、あの説教を聽

いて私は今更の如くに感じました。

唯圓「私はあれを聞いて不安な氣が致します。私は此の頃は寂しい氣が何時

も致します。ぼんやりしてお經を讀んでも心が躍らない時があります。

私は病身で先月も少し熱が高かつたので、死ぬのではないかと恐くて堪

りませんでした。今死んでは惜しくてなりません。私は何だかあくが

れる様な、浮世を懐かしむやうな氣が催して來ます。智應様のやうに強

い證據あかしを立てることが出來ません。法悦が救の證據とすれば、私は救は

れて居ないのでせうか。私は此の様でも、佛様が助けて下さることだけは疑はないのですけれど……

僧一「體の弱いせらうと私は思ひます。

僧三「やはり信心が若いからではありますまいか。

唯圓「お師匠様一體どうなので御座いませう。教へて下さい。私は不安で堪りません。私は助かつて居ますか、居ませんか。

親鸞「助かつて居ます。心配することはありません。實は私も唯圓と同じ心持で暮してゐます。病氣の時は死を怖れ、煩惱には絶えず催され、時々寂しくて堪らなくなる事もあります。踴躍歡喜の情はどうもおろそかになりがちでな。時に燃えるやうな法悦三昧に入ることもあるが、其の高潮はやがて灰の様に散り易くてな。私は始終苦しんで居ます。

僧一「驚きて親鸞を見る。「あなたがですか。

親鸞「私はなせかうなのだらうと何時も自分を責めて居ます。よくよく私は業が深いのだ。私は老年になつてかうなのだから、若い唯圓が苦しむのも無理はない。しかし私は決して救は疑はぬのだ。佛はかねて知ろし

めして煩惱具足の凡夫と仰せられた。その致し方のない罪人の私等を此の儘助けて下さるのだ。

僧三「では智應殿のお考は間違で御座いますか。

親鸞「いや間違ではない。人によつて業の深淺があるのだ。法悦の相續出来る人は恵まれた人だ。私は其の様な人を祝福する。或人は煩惱が少く、或人は煩惱が強くて苦しむのだ。只法悦を救の證據とするのが淺い。智應にも話さうと思つて居るが、よくお聞きなさい、救には一切の證據はありませんぞ。其の證據を求めるのは此方の計ひで、一種の自力です。救は佛様の願で成就してゐる。私等は自分の機に關らず只信じればよいのです。業の最も淺い人と深い人とは、まるで相違した此の世の渡りやうをします。併しどちらも助かつて居るのです。

唯圓「私は有難い氣が致します。勿體ない程で御座います。

僧一「私は其處に氣が付きませんでした。法悦があつてもなくても、私等の心の有様の變化には關りなしに、救は確立してゐるので御座いますね。

親鸞「それでなくては運命に毀たれぬ確な救と言はれません。私等の心の有

様は運命で動かされるのだからな。

僧三「やはり自らの功で助けられようとする自力根性が残つて居るのですね。すべてのものを佛様に返し奉ることは、容易で御座いませんね。

親鸞「何もかもお任せする素直な心になりたいものだな。

唯圓「聞けば聞くほど深い教で御座います。

親鸞「みんな助かつて居るのぢや。唯それに氣が附かぬのぢや。

「出家と其の弟子」

最新女子國文 修正版 卷八終

昭和六年十二月三日
文部省檢定
高等女子學校國語科用

昭和六年七月二十日 印刷
昭和六年七月二十五日 發行
昭和六年十一月二十二日 訂正再版印刷
昭和六年十一月二十七日 訂正再版發行

最新女子國文 修正版 全十冊

定價各冊 金六拾錢



不許複製

著者	松村武雄
發行者	株式會社 寶文館 東京市日本橋區室町四丁目五番地八 右代表者 大葉久治
發行兼印刷者	株式會社 大阪寶文館 大阪市西區阿波堀通四丁目二十番地 右代表者 柏佐一郎

發兌

大阪市西區阿波堀通四丁目
神戶市元町通五丁目
小倉市京町一丁目
東京市日本橋區室町四丁目

株式會社 大阪寶文館
株式會社 寶文館

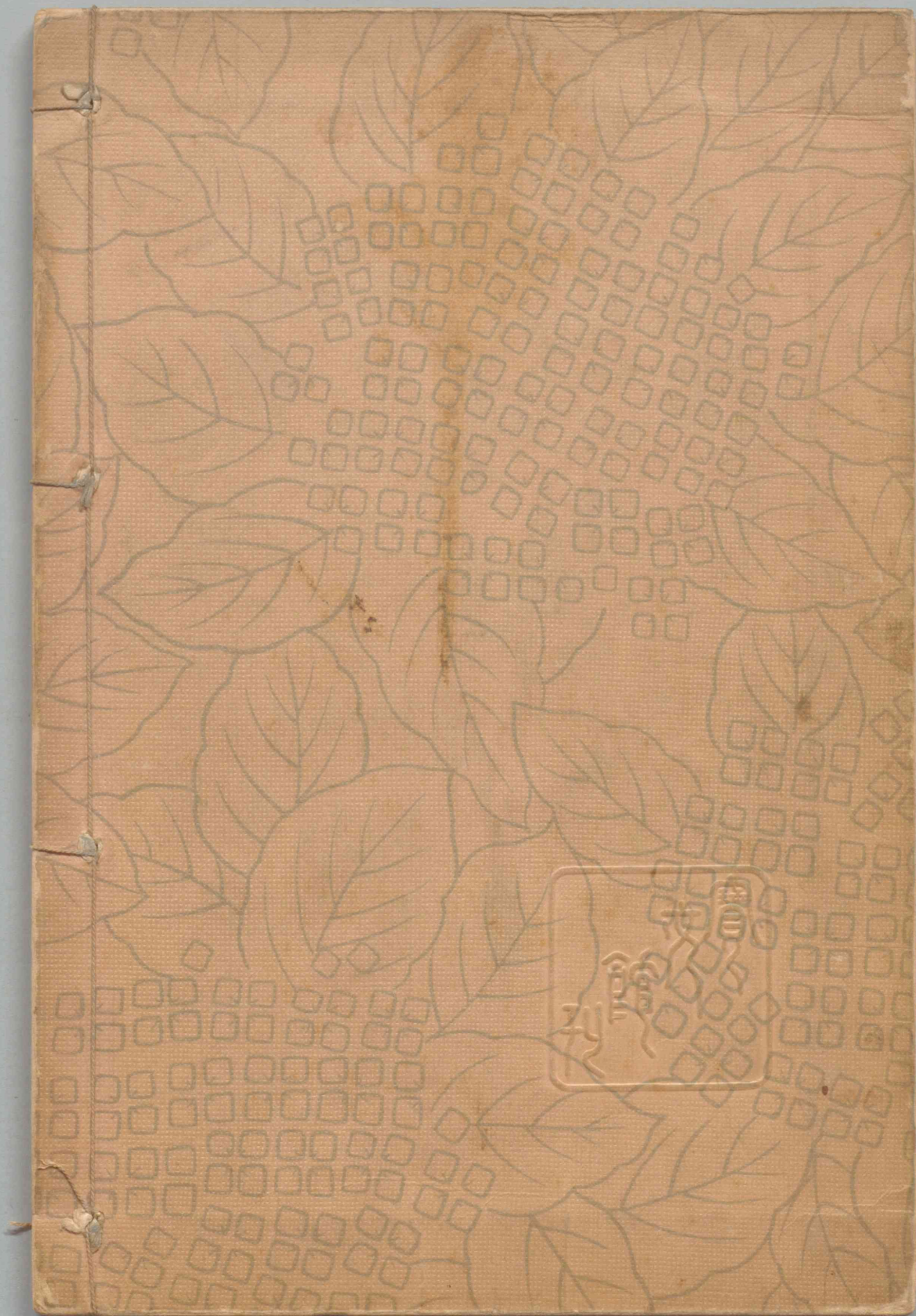
內外出版印刷株式會社印行

45

四年三組

千賀富子

288



徂徠 (ゆくとまはる)

休 (とま) 休 (とま) 休 (とま)

敷 (名) 風張 (名) 直 (名) 又 (名)

結構 (名) 美 (名) 観 (名) 美 (名) 観 (名)

結 (名) 美 (名) 観 (名) 美 (名) 観 (名)

飽 (名) 美 (名) 観 (名) 美 (名) 観 (名)

美 (名) 観 (名) 美 (名) 観 (名) 美 (名) 観 (名)

美 (名) 観 (名) 美 (名) 観 (名) 美 (名) 観 (名)

美 (名) 観 (名) 美 (名) 観 (名) 美 (名) 観 (名)

一流 (名) 一流 (名) 一流 (名)

一流 (名) 一流 (名) 一流 (名)

配 (名) 配 (名) 配 (名)

峰 (名) 峰 (名) 峰 (名)

二 (名) 二 (名) 二 (名)

二 (名) 二 (名) 二 (名)

二 (名) 二 (名) 二 (名)

二 (名) 二 (名) 二 (名)

二 (名) 二 (名) 二 (名)

